はじめに

本講義は地方国公立大や日東駒専・産近甲龍といった中堅私立大合格を目標とする講座です。

現代文といえば

「勉強しても意味がない」
「コスパが悪い」

と一般には考えられています。しかし、論理的構造分析を身につけ、論理のルールに従って解答をしていけば、全ての問題に根拠をもって解答することができるのです。

「現代文は勉強しても意味がない」
という常識を覆すのがこの講義です。

本講義を終えたとき
「周りがほとんどまともな対策をしない現代文こそ、差をつけることができる科目だ」
と思えるように講義をしていきます。

この講義で、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① 文法
② 構文
③ 論理

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界

共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

・「でない」という否定
・「かつ」という連言
・「または」という選言
・「ならば」という条件法

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

本講義では「制限時間あり」で60%を目標として解答してください。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　**問題を解く。解答の根拠をメモしておく。**

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、各チャプター後に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント　**復習ポイントを覚える。解答を書き直す。**

国公立大・私立大　現代文対策講座　目次

第一講　「差異」と「類似」を読む……p.8
第二講　「論証」を読む……p.26
第三講　「心情」を読む……p.44
第四講　傍線部内容説明問題解法……p.70
第五講　傍線部理由説明問題解法……p.86
第六講　空所補充問題解法……p.108
第七講　心情把握問題解法……p.122
第八講　内容真偽問題解法……p.136

巻末付録
読解法一覧……p.154
傍線部内容説明問題解法……p.174
傍線部理由説明問題解法……p.177
傍線部心情把握問題解法……p.185
空所補充問題解法……p.189
脱文補充問題解法……p.190
文整序問題解法……p.191
内容真偽問題解法……p.192

第一講「差異」と「類似」を読む　30分

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

大学の知が「役に立つ」のは、必ずしも国家や産業に対してだけとは限りません。神に対して役に立つこと、人に対して役に立つこと、そして地球社会の未来に対して役に立つこと——。大学の知が向けられるべき宛先にはいくつものレベルの違いがあり、その時々の政権や国家権力、近代的市民社会といった[X]リンカイを超えています。

そしてこの多層性は、時間的なスパンの違いも含んでいます。文系の知にとって、三年、五年ですぐに役に立つことは難しいかもしれません。しかし、三〇年、五〇年の中長期的スパンでならば、工学系よりも人文社会系の知のほうが役に立つ可能性が大です。ですから、「人文社会系の知は役に立たないけれども大切」という議論ではなく、「人文社会系の知は長期的にとても役に立つから価値がある」という議論が必要なのです。

そのためには、「役に立つ」とはどういうことかを深く考えなければなりません。概していえば、「役に立つ」ことには二つの次元があります。

一つ目は、［　A　］［(a)］型です。これは、どちらかというと理系的な知で、文系は苦手です。たとえば、東京と大阪を行き来するために、どのような技術を組み合わせれば最も速く行けるのかを考え、開発されたのが新幹線でした。また最近では、情報工学で、より効率的なビッグデータの処理や言語検索のシステムが開発されています。いずれも目的は所与[Y]で、その目的の達成に「役に立つ」成果を挙げます。文系の知にこうした目に見える成果の達成は難しいでしょう。

しかし、「役に立つ」ことには、実はもう一つの次元があります。たとえば本人はどうしていいかわからないでいるのだけれども、友人や教師の言ってくれた一言によってインスピレーションが生まれ、厄介だと思っていた問題が一挙に解決に向かうようなときがあります。この場合、何が目的か最初はわかっていないのですが、その友人や教師の一言が、向かうべき方向、いわば目的や価値の軸を発見させてくれるのです。このようにして、［　B　］ことを［(b)］型と呼んでおきたいと思います。これは、役に立つと社会が考える価値軸そのものを再考したり、新たに創造したりする実践です。文系が「役に立つ」のは、多くの場合、この後者の意味においてです。

古典的な議論では、ドイツの社会学者マックス・ウェーバーによる「目

的合理的行為」と「価値合理的行為」という区分があります。そこでは、合理性には「目的合理性」と「価値合理性」の二つがある、と言われました。「目的合理性」とは、ある目的に対して最も合理的な手段連鎖が組み立てられていくことであるのに対し、「価値合理性」は、何らかの目的に対してというよりも、それ自体で価値を持つような活動です。

ウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で論じたことは、プロテスタンティズムの倫理は価値合理的行為であったのだが、その行為の連鎖が結果的にきわめて目的合理的なシステムである資本主義を生み出し、やがてその価値合理性が失われた後も自己転回を続けたという洞察です。そこで強調されたのは、[C]目的合理性が自己完結したシステムは、いつか価値の内実を失って化石化していくのだが、目的合理的な行為自体がその状態を内側から変えていくことはできない、という暗澹（あんたん）たる予言でした。ウェーバーは、そのように[Z]クウソになったシステムを突破するのに、価値合理性やカリスマといったシステムへの別の介入の回路を考えようとしていたわけです。

このウェーバーの今なお見事な古典的洞察に示されるように、(a)型の有用性、「役に立つこと」は、与えられた目的や価値がすでに確立されていて、その達成手段を考えるには有効ですが、そのシステムを内側から

変えていくことができません。したがって目的や価値軸そのものが変化したとき、一挙に役に立たなくなります。

つまり、(a)型ないしは手段的有用性としての「役に立つ」は、与えられた目的に対してしか役に立つことができません。もし目的や価値の軸そのものが変わってしまったならば、「役に立つ」と思って出した解も、もはや価値がないということになります。そして実際、こうしたことは、長い時間のなかでは必ず起こることなのです。

価値の軸は、決して不変ではありません。数十年単位で歴史を見れば、当然、価値の尺度が変化してきたのがわかります。たとえば、一九六〇年代と現在では、価値軸がすっかり違います。一九六四年の東京オリンピックが催されたころは、より速く、より高く、より強くといった右肩上がりの価値軸が当たり前でしたから、その軸にあった「役に立つ」ことが求められていました。新幹線も首都高速道路も、そのような価値軸からすれば追い求めるべき「未来」でした。超高層ビルから湾岸開発まで、成長期の東京はそうした価値を追い求め続けました。ところが二〇〇〇年代以降、私たちは、もう少し違う価値観を持ち始めています。末長く使えるとか、リサイクルできるとか、ゆっくり、愉快に、時間をかけて役に立つことが見直されています。価値の軸が変わってきたのです。

よく言われるのは、ソニーのウォークマン[注1]とAppleのiPad／iPhone[注2]の違いです。ソニーはなぜAppleになれなかったのかを考えたとき、ソニーは既存の価値の軸を純化していった。つまりウォークマンはステレオの聴くという機能に特化して、それをモバイル化した。その意味では非常に革新的だったのですが、ウォークマンはあくまでもステレオだったわけです。ところがiPad／iPhoneは、パソコン、そして携帯電話という概念自体を変えてしまった。コミュニケーションがどういうものであって、そのなかでどのような技術が必要かという考え方をしているから、テクノロジーの概念そのものを変えてしまった。これが価値の軸が変化しているということです。五年や一〇年では変わらないかもしれませんが、より長いスパンで見れば、必ず価値の軸は転換をしていくわけです。

ソニーに限らず、与えられた価値軸の枠内でウォークマンのような優れた製品を作るのは、日本の、特に工学系の強みでしょう。しかしiPad／iPhoneの例が示すように、価値の転換をするというのは概念の枠組みそのものを変えてしまうことで、与えられたフレームのなかで優れたものを作るのとは別次元の話です。大きな歴史の流れのなかで価値の軸そのものを転換させてしまう力、またそれを大胆に予見する力が弱いのは日本社会の特徴であり、それが、日本が今も「後追い」を余儀なくされる主な原因

だと私は思います。

　すべてがそういうわけではありませんが、概して理系の学問は、与えられた目的に対して最も「役に立つ」ものを作る、[(a)]型の知であることが多いと思います。そして、そのような手段的有用性においては、文系よりも理系が優れていることが多いのも事実です。しかし、もう一つの[(b)]的に「役に立つ」という点ではどうでしょうか。

　[(a)]型の知は、短期的に答えを出すことを求められます。しかし、[(b)]的に「役に立つ」ためには、長期的に変化する多元的な価値の尺度を視野に入れる力が必要なのです。ここにおいて文系の知は、短くても二〇年、三〇年、五〇年、場合によっては一〇〇年、一〇〇〇年という、総体的に長い時間的スパンのなかで対象を見極めようとしてきました。これこそが文系の知の最大の特徴だと言えますが、だからこそ、文系の学問には長い時間のなかで[(b)]的に「役に立つ」ものを生み出す可能性があるのです。

　また、多元的な価値の尺度があるなかで、その時その時で最適の価値軸に転換していくためには、それぞれの価値軸に対して距離を保ち、批判していくことが必要です。そうでなければ、一つの価値軸にのめり込み、それが新たなものに変わったときにまったく対応できないということになる

でしょう。たとえば過去の日本が経験したように、「鬼畜米英」となれば一斉に「鬼畜米英」に、「高度成長」と言えば皆が「高度成長」に向かって走っていくというようなことでは、絶対に新しい価値は生まれません。それどころか、D<u>そうやって皆が追求していた目標が時代に合わなくなった際、新たな価値を発見することもできず、どこに向かって舵（かじ）を切ったらいいか、再び皆でわからなくなってしまうのです。</u>

価値の尺度が劇的に変化する現代、前提としていたはずの目的が、一瞬でひっくり返ってしまうことは珍しくありません。そうしたなかで、いかに新たな価値の軸をつくり出していくことができるか。あるいは新しい価値が生まれてきたとき、どう評価していくのか。それを考えるには、［(a)］的な知だけでは駄目です。価値の軸を多元的に捉える視座を持った知でないといけない。そしてこれが、主として文系の知なのだと思います。

なぜならば、新しい価値の軸を生んでいくためには、現存の価値の軸、つまり皆が自明だと思っているものを疑い、反省し、批判を行い、違う価値の軸の可能性を見つける必要があるからです。経済成長や新成長戦略といった自明化している目的と価値を疑い、そういった自明性から飛び出す視点がなければ、新しい創造性は出てきません。ここには文系的な知が絶

対に必要ですから、理系的な知は役に立ち、文系的なそれは役に立たないけれども価値があるという議論は間違っていると、私は思います。主に理系的な知は短く役に立つことが多く、文系的な知はむしろ長く役に立つことが多いのです。 125

（吉見俊哉「「文系学部廃止」の衝撃」による）

（注1）ウォークマン……日本の企業ソニーが開発した小型のポータブル・オーディオプレーヤー

（注2）iPad／iPhone……アメリカの企業 Apple が開発したタブレット型端末とスマートフォン

問一　傍線部X「リンカイ」を漢字で書き表すとき、「リン」の文字と組み合わせて**二字熟語とならないもの**を次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えよ。

①　降　　②　床　　③　接　　④　君　　⑤　終

問二　傍線部Y「所与」と対立的な意味を持つ言葉は、後の語群の中にいくつあるか。次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えよ。

①　一つ　　②　二つ　　③　三つ　　④　四つ　　⑤　五つ

（語群）　与件　　不明　　既知　　所定　　未詳

問三 傍線部Z「クウソ」を漢字で書き表すとき、「ソ」の文字と組み合わせて二字熟語となるものは、後の語群の中にいくつあるか。次の①〜⑤の中から一つ選び、数字で答えよ。

①　一つ　②　二つ　③　三つ　④　四つ　⑤　五つ

（語群）朴　遠　密　外　通　隔

問四　空欄 A と B に入る語句の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えよ。

① A―ア　B―ウ
② A―イ　B―エ
③ A―ウ　B―エ
④ A―ウ　B―オ
⑤ A―イ　B―オ

ア　理論を応用して、従来なかった新しいものを創造する
イ　もっぱら「役に立つ」ものの創造を目指す
ウ　目的がすでに設定されていて、その目的を実現するために最も優れた方法を見つけていく
エ　さまざまな既存の価値の中から最適なものを見つけ出して、時代に適応する
オ　「役に立つ」ための価値や目的自体を創造する

問五　空欄 (a) に共通して入る言葉と空欄 (b) に共通して入る言葉との組み合わせとして、もっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えよ。

① (a) 合理　(b) 非合理
② (a) 理性　(b) 感情
③ (a) 理論　(b) 実践
④ (a) 合目的　(b) 無目的
⑤ (a) 目的遂行　(b) 価値創造

問六　傍線部Ｃ「目的合理性が自己完結したシステムは、いつか価値の内実を失って化石化していくのだが、目的合理的な行為自体がその状態を内側から変えていくことはできない」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えよ。

①　ある目的を達成するために最も合理的な手段の連鎖が組み立てられていくと、それはそれ自体で価値を持つようになるが、そうなると、その新しい価値が追求するシステムが確立され、それを変えることはできなくなる

②　プロテスタンティズムの倫理は価値を追求する行為の連鎖を生み出し、それが結果的に資本主義というきわめて目的合理的なシステムを確立したが、そのシステムは、その後プロテスタンティズムの倫理が衰弱したために止めることができなくなり、自己転回を続けた

③　目的合理性だけを追求するシステムは、手段として自己完結するようになって他の物を必要としなくなるが、そうするとそれは化石のように硬直して価値を受け付けなくなり、価値によって変えることができなくなる

④　目的を達成するための合理的な手段の連鎖が組み立てられて、きわめて目的合理的なシステムが出来上がると、そのシステムは自己運動を続けるようになるが、単なる手段の連鎖と化したそのシステム自体には、価値と離れた自己運動を変えることができない

⑤　価値がまだ確立していない状態で目的合理性だけを追求すると、それはきわめて硬直したシステムを生み出すようになり、そうすると、価値が確立されたとしても、そのシステムを内側の価値によって変えることができなくなる

問七　傍線部D「そうやって皆が追求していた目標が時代に合わなくなった際、新たな価値を発見することもできず、どこに向かって舵を切ったらいいか、再び皆でわからなくなってしまうのです」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えよ。

①　「鬼畜米英」や「高度成長」という目標はもう時代に合わなくなっているのに、それに気づくことができなくなってしまったから

②　「鬼畜米英」や「高度成長」はそもそも目指すべき目標としては適切ではなかったのに、多元的な価値の尺度を持たなかったために、そのことを最初から認識できなかったから

③　一つの価値軸にのめり込むと、そこから距離を取ったりそれを批判したりすることができないため、他の価値軸を考えられなくなっているから

④　短期的に答えを出すことだけを求めると、物事を長期的に見ることができなくなってしまい、進むべき方向を見失ってしまうから

⑤　価値の尺度が劇的に変化し、前提としていたはずの目的が一瞬でひっくり返ってしまうことがあるのに、それに気づかないことがあるから

問八　後のア～オのうち、本文の論旨に合致するものはいくつあるか。次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えよ。

①　一つ　　②　二つ　　③　三つ　　④　四つ　　⑤　五つ

ア　理系の知は役に立つので価値があり、文系の知は役に立たないが価値はある

イ　理系の知はすべて短期的には役に立つが長期的には役に立たず、他方、文系の知はすべて短期的には役に立たないが長期的には役に立つ

ウ　大学の知は、神や地球の未来などさまざまなものに役に立ちうるし、また数十年、数百年といった長い時間の中で役に立ちうる

エ　日本が今も「後追い」を余儀なくされている状況を脱するには、理系の学問を強化する必要がある

オ　新しい創造性を生み出すには、与えられている目的や価値を疑うことが必要である

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

第二講「論証」を読む　30分

次の［Ⅰ］は、２００５年11月29日付の毎日新聞紙上の「記者の目」という欄に、毎日新聞大阪経済部の高田茂弘記者が書いた記事であり、［Ⅱ］はその記事に対する反論として、翌週の同じ欄に、科学環境部の江口一記者が書いた記事である。これらの文章を読んで、後の問に答えよ。

［Ⅰ］ 人間活動による二酸化炭素（CO_2）の排出増で大気内の「温室効果」が強まり、地球が温暖化している。これは異常気象、海面の上昇などにつながる恐れが強い。だから、CO_2の排出量を減らすべきだ――。

97年採択・今年2月発効の京都議定書※、環境省主唱の「クールビズ」「ウォームビズ」※と「環境税（地球温暖化対策税）導入」は、この「人為的地球温暖化」論がベース。だが私は、関係者のドグマ（教条）と化した<u>その三段論法</u>[A]には疑問が多いと思う。人為的温暖化論は真偽不明で、議定書は非科学的、CO_2排出権取引などの「京都メカニズム」※は虚構によりかかった一部諸国の妥協の産物ではないか、と考えるからだ。

デンマークの統計学者、ビョルン・ロンボルグさんは大論争を生んだ著

書「環境危機をあおってはいけない」（01年、日本語版は03年＝文芸春秋）で、CO_2排出の影響が無視していいほどか、それともかなり大きいのかを見極め、対策のコストが見合うかどうかを考えよと主張した。だが、日本では議定書の順守が議論以前の、有無を言わせぬ命題になっている。

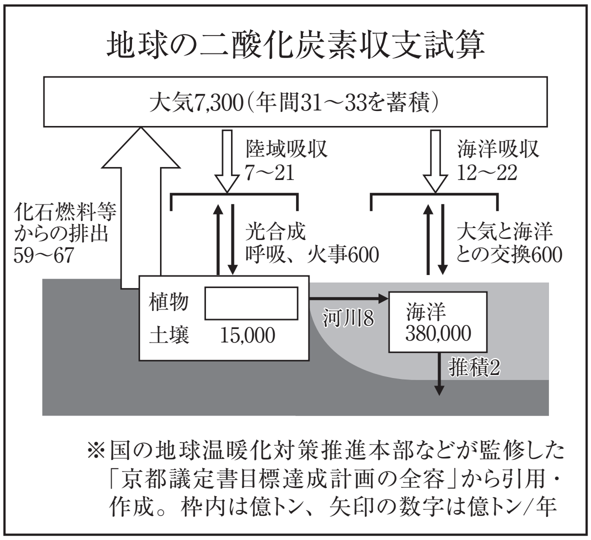
他の多数の関連リポートも踏まえると、少なくとも80年代以降、地球の平均気温が上がっていることは確かだ。大気中のCO_2濃度も徐々に上昇中。ところが一方には、ハワイなどで観測された「気温上昇から半年〜1年後に並行してCO_2濃度が高まる」という、「常識」とは逆の関係を示すデータもある。気温上昇の結果、CO_2が増えるというこの因果関係を温暖化論は無視している。

ではなぜ、平均気温が上がっているのか。恐らくCO_2以外に、太陽エネルギーの周期的な変化、地磁気の変動、雲・微粒子など、多数の要因が度合いは未解明ながらも、複雑に絡み合っているのだろう。特にCO_2ではなく、太陽の変化や黒点の動きに温暖化の主因を求める研究者は少なくない。だが、温暖化論者には「太陽活動が気候変動に及ぼす影響は小さい」と、論証抜きでその研究を脇に置く共通の傾向がある。

02年の「地球温暖化論への挑戦」（八千代出版）で「懐疑派」に注目された帝塚山学院大学助教授、薬師院仁志さん（社会学）は「私はCO_2排

出増による温暖化論を否定したいのではない。科学的な説明を欠く予想が既成事実化し、[a]されているのが解せないだけだ」と念を押す。

【図】



B地球上の二酸化炭素のありかと動きを示す収支試算をみると気付くことがある。大気と海洋間を行き来するCO_2は年間６００億トン、植物の光合成および呼吸と火事による出入りも同６００億トン。これに対し、化石燃料からの排出など、人間活動に起因するCO_2は同59億〜67億トン。他に植物

や土壌内に2兆トン、海洋に38兆トン、大気に0・73兆トンが存在するとされる(炭素換算＝試算はいくつもあり、しかもまちまちだが)。全体から見れば、人間活動による排出分の比率は数%、ある試算では3・5%という。他の収支に増減があれば、容易に［ b ］されてしまうような比率だ。

温暖化の速度や気温上昇幅の予測は発表の度に小さくなっている。一方、温暖化やCO_2増が農業適地の拡大や生産性の向上をもたらす、という予測はあまり語られない。温暖化で増えるという異常気象を「30年に1度」の定義で限るとしても、人類は有史以来、一貫して異常気象の中にあるという見解もある。

CO_2の排出削減では、排出権取引など「京都メカニズム」の全過程で毎年、数百億ドル(数兆円)が動くという。コストは各国政府が賄い、関連ビジネスで企業などが稼ぐという構図だ。そもそも議定書が90年比で減らすべきだとした目標の比率(欧州8%、米国7%、日本6%など)に科学的根拠がないことは周知の事実で、国別のCO_2排出量や国内総生産(GDP)で計算すれば比率は別の数字になる。環境省の速報値で04年度の国内排出量は90年比7・4%増だったというが、目標との差「13・4%」を減らす遠い道のりに絶望する前に、目標自体を疑ってみる方が健全ではないか。

温暖化論を巡る取材では「専門家は大半が（人為的温暖化論を）変だと思っている」という声をしきりに聞く。国の政策に採用され、「クールビズ」「ウォームビズ」も当座、省エネに役立つ。反対はヤボだ。そんなところかもしれない。

だが、現状のままでは、コストと効果を対比する議論なしで、無駄と無理に足を取られてしまうだけではないだろうか。自然科学の研究者には、断定調の結論ではなく、事実と観測に基づいた現時点での客観的な見解を示してほしいと思う。

Ⅱ

[C]「カビの生えた古文書のような、古臭い議論だな」。大阪経済部の高田茂弘記者による11月29日付記者の目「人為的温暖化論は真偽不明」を一読しての感想である。地球温暖化対策や京都議定書をめぐる論点がずれているのではないか。問題の焦点は科学の真贋（しんがん）論争ではない、と私は思う。

高田記者の主張は次の通りだ。人間活動による二酸化炭素（CO_2）の排出増が地球温暖化の原因というのは真偽不明で、日本に90年比で6％の温室効果ガス排出削減を義務付けた議定書は非科学的。排出権取引などの京都メカニズムは［ c ］、議定書の目標自体を疑ったほうがよい――。

「真偽不明」は、ある意味で正しい。科学の仮説を立証するには再現性

が不可欠だが、この論を実験で再現することは不可能だからだ。ただし同じ論理で「 d 」という説も、真偽不明だ。21世紀末になっても真実の完全証明は不可能だろう。

　世界中の数百人の科学者が参加した「気候変動に関する政府間パネル」（IPCC）の第3次報告書（01年）は、既存の知見を基に「20世紀に全地球平均で0・6度、温度が上昇した」「最近50年間の温暖化の大半は、人為的だという強い根拠がある」「このまま対策をとらなければ、2100年には地球の平均気温は1・4〜5・8度上昇する」などと指摘した。

　その後もコンピューターの高性能化や観測網の強化などで予測精度は年々、高くなり、人為的温暖化論は優勢になりつつある。京都議定書を頑強に否定する米ブッシュ政権が参加した7月のグレンイーグルズ・サミットでも「人間活動が地球の表面の温暖化に密接に関係し、温室効果ガスの増加の主要な原因になっていることを理解している」とした気候変動に関する成果文書が採択されたほどだ。

　私は、温暖化には人為的影響以外の要因があるという説にも傾聴すべきものがあり、人為論にはいろいろな「矛盾」「不明点」があることを認めた上で、人為論の方がより確からしいと判断している。しかし科学論争自体への個人的な賛否はひとまず脇に置きたい。重要なのは、これまでの研

究成果をどう読み取り、私たちの社会がどのように行動すべきかという政策決定の問題だと考えるからだ。

　数百人もの科学者が参加したＩＰＣＣ報告書が指摘したことは、温暖化対策としてCO_2削減を進める政策を選択するのに不十分な根拠だろうか。これは一例だが、高田記者が指摘した懐疑論と同等数以上の人為論が公表されている。温暖化のメカニズム解明の努力を続けつつも、人間活動による温暖化予測が「正解」だった場合のリスクに備えて、行動すべきではないのだろうか。

　水俣病をはじめとする過去の公害問題や、※血液製剤汚染による血友病患者のＨＩＶ感染など「科学的な結論が出ていない」という理由で多くの人命を失った苦い記憶が私たちにはある。アスベスト（石綿）問題でも繰り返してしまった。仮に温暖化が人間活動の影響で進み、その結果として洪水、干ばつなどの異常気象が頻発するとの予測が現実化したら、最初に命を落とすのは、そうした災害への対処が難しい、貧しく弱い人々だ。科学論争の決着まで行動しないのは、弱者に大きなリスクを負わせる「不正義」である。

　「地球規模の予防原則」に基づいて対処するため、温室効果ガスの濃度安定を究極の目標とした「気候変動枠組み条約」に１８９カ国・地域が批

准し、その目標達成のために温室効果ガス削減量の数値目標などを定めた京都議定書に１５７カ国・地域が批准したのである。最大の排出国ながら議定書から離脱した米ブッシュ政権に強い批判があるのも、自国のわがままな論理だけ振りかざし、他国が受け入れた責任と痛みから逃れているためだ。

　現在、カナダ・モントリオールで開かれている初の議定書締約国会議（ＣＯＰ／ＭＯＰ１）は米国と途上国、欧州連合（ＥＵ）などの意見が対立し、その行方が極めて不透明な状況に陥っている。日本国内も削減目標の根拠や高いハードルなどをめぐり、議定書への懐疑論、不満がある。

　しかしホスト国として京都で開かれた会議で議定書が採択され、日本がこれを批准した事実は重い。外務省幹部は「批准した以上、議定書を守らなければならない。守らなくてもいいという選択肢は絶対にあり得ない」と語ったが、まったく同感だ。議定書を守るか否かも、もはや［ e ］の問題ではない。［ f ］が守れるか、その姿勢が問われている。

※注　京都議定書……１９９７年に京都で開かれた第３回気候変動枠組条約締約国会議で採択された議定書で、地球温暖化の原因となる二酸化炭素などの温室効果ガスの削減目標を国別に定めた。

ウォームビズ……環境省が２００５年に提唱した省エネのためのキャンペーンで、夏に涼しい服装で冷房温度を上げるクールビズに対し、冬に暖かい服装で暖房温度を下げようというもの。

京都メカニズム……京都議定書に定められた、温室効果ガスの削減をより容易にするための規定で、国家間での排出量取引を可能にする規定などがこれに含まれる。

血液製剤汚染による血友病患者のＨＩＶ感染……１９８０年代に、血友病患者の治療に非加熱の血液製剤が使われたため、多くのＨＩＶ感染者を出した問題。科学的判断と行政の対応の遅れにより、被害が拡大したとされる。

問一　傍線A「その三段論法」とあるが、この文章における「三段論法」とは、①「AはBのせいである」、②「CはAのせいである」という二つの前提から、③「よってCはBのせいである」という結論を導く、三段階の推論方法であると考えられる。この場合のA、B、Cにあてはまるものの組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア　A―地球の温暖化　B―人間活動　C―二酸化炭素の排出量削減

イ　A―異常気象、海面の上昇など　B―二酸化炭素の排出増　C―地球の温暖化

ウ　A―二酸化炭素の排出量削減　B―人間活動　C―異常気象、海面の上昇など

エ　A―地球の温暖化　B―二酸化炭素の排出増　C―異常気象、海面の上昇など

オ　A―二酸化炭素の排出量削減　B―異常気象、海面の上昇など　C―地球の温暖化

問二　空欄a、bに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア　a―重要視　　b―算出
イ　a―自明視　　b―相殺
ウ　a―同一視　　b―吸収
エ　a―疑問視　　b―予測
オ　a―当然視　　b―誤解

問三　傍線B「地球上の二酸化炭素のありかと動きを示す収支試算をみると」とあるが、これを示した【図】「地球の二酸化炭素収支試算」の中で、一箇所の数字が空欄になっている。この空欄に入る数字を、この図を完成させるのに適切な表記のしかたで、解答欄に記入せよ。

問四　傍線Ｃ「カビの生えた古文書のような、古臭い議論だな」とあるが、これは江口記者が高田記者の記事の内容をどう感じたことを意味していると思われるか。最も適当なものを、次のア〜オの中から選び、記号で答えよ。

ア　以前に何度も議論されたことがあるが、現在ではその議論を繰り返す意味がないものだと感じている

イ　以前に議論された時点では有効だったが、時間の経過によりその内容が不確かになったと感じている

ウ　以前に議論された時点で注目されなかったものを、今また持ち出すことが理解できないと感じている

エ　以前から議論されることなく埋もれていた問題を、ここで初めて紹介したことを奇異だと感じている

オ　以前から議論され続けてきた問題だが、これだけ長時間議論を続けることに飽きてきたと感じている

問五　空欄ｃに入る最も適当な五字の表現を、［Ｉ］（「人間活動による……示してほしいと思う。」）から抜き出して記せ。ただし句読点や符号がある場合には、それも字数に数える。

問六　空欄ｄに入る最も適当な表現を、次のア～カの中から選び、記号で答えよ。

ア　専門家は大半が人為的温暖化を認めている
イ　専門家は大半が人為的温暖化を疑っている
ウ　議定書の目標には科学的根拠がある
エ　議定書の目標には科学的根拠がない
オ　温暖化は人間活動の影響によるものだ
カ　温暖化は人間活動の影響ではない

問七 空欄ｅ、ｆに入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次のア〜オの中から選び、記号で答えよ。

ア　ｅ―解釈のレベル　　ｆ―発展途上国の弱者
イ　ｅ―科学のレベル　　ｆ―国際社会への約束
ウ　ｅ―議論のレベル　　ｆ―国別で目標とした数値
エ　ｅ―政治のレベル　　ｆ―会議開催国としての立場
オ　ｅ―目標のレベル　　ｆ―環境先進国としての地位

問八 実際の新聞紙上には、Ⅰ と Ⅱ の記事にそれぞれ見出しがついている。その組み合わせとして最も適当なものを、次のア〜オの中から選び、記号で答えよ。

ア　Ⅰ―遠い道　絶望する前に　　Ⅱ―懐疑論こそが非科学的
イ　Ⅰ―CO_2 収支試算に新事実　　Ⅱ―リスクへの対処が急務
ウ　Ⅰ―議定書目標　疑ってみよう　　Ⅱ―問われているのは行動だ
エ　Ⅰ―専門家　大半が変だと証言　　Ⅱ―科学的データ　再び検証を
オ　Ⅰ―有無を言わせぬ命題に疑問　　Ⅱ―温暖化対策　弱者にリスク

問九　[Ⅰ]の記事を書いた高田記者は、江口記者による[Ⅱ]の記事が掲載されたあとで、さらに江口記者の反論に対する再反論の記事を書いている。次の文章はこの再反論記事の一部である。空欄X、Yに入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次のア〜オの中から選び、記号で答えよ。

私は「人為的温暖化」論を[X]。不明な部分が多く、コストと効果の対比も不十分なのに、温暖化論が[Y]ことを不審に思っているだけだ。

ア　X—肯定もしないし、疑いもしない
　　Y—政府関係者の「教条」と化している

イ　X—疑うより、むしろ肯定している
　　Y—多様な「選択」の自由を否定している

ウ　X—否定はするが、固執する気もない
　　Y—科学的な「事実」として報道されている

エ　X—疑っているわけでは、まったくない
　　Y—世間の「常識」とかけ離れている

オ　X—疑っているだけで、否定してはいない
　　Y—無二の「真理」のように扱われている

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

第三講 「心情」を読む 30分

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

残暑の夕日が(ア)一しきり夏の盛よりも烈しく、ひろびろした河面一帯に燃え立ち、殊更に大学の艇庫の真白なペンキ塗の板目に反映していたが、

Ⅰ

長吉は先刻から一人ぼんやりして、或時は(注1)今戸橋の欄干に凭れたり、或時は岸の石垣から渡場の桟橋へ下りて見たりして、夕日から黄昏、黄昏から夜になる河の景色を眺めていた。今夜暗くなって人の顔がよくは見えない時分になったら今戸橋の上でお糸と逢う約束をしたからである。しかし丁度日曜日に当って夜学校を口実にも出来ない処から夕飯を済すが否やまだ日の落ちぬ中ふいと家を出てしまった。

一しきり渡場へ急ぐ人の往来も今では殆ど絶え、橋の下に夜泊りする荷船の燈火が(注2)慶養寺の高い木立を倒に映した(注3)山谷堀の水に美しく流れた。門口に柳のある新しい二階家からは三味線が聞えて、水に添う低い小家の格子戸外には裸体の亭主が涼みに出はじめた。長吉はもう来る時分であろ

うと思って一心(いっしん)に橋向うを眺めた。

(イ)最初に橋を渡って来た人影は黒い麻の僧衣(ころも)を着た坊主であった。つづいて(注4)尻端折(しりはしおり)の股引(ももひき)にゴム靴をはいた(注5)請負師(うけおいし)らしい男の通った後(あと)、暫(しばら)くしてから、蝙蝠傘(こうもりがさ)と小包を提げた貧し気(げ)な女房が(注6)日和下駄(ひよりげた)で色気もなく砂を蹴(け)立(た)てて大股(おおまた)に歩いて行った。もういくら待っても人通りはない。長吉は詮方(せんかた)なく疲れた眼を河の方に移した。河面(かわづら)は先刻(さっき)よりも一体に明(あか)くなり気味悪い雲の峯は影もなく消えている。長吉はその時(注7)長命寺辺(ちょうめいじへん)の堤の上の木立から、(注8)他分(たぶん)旧暦七月の満月であろう、赤味を帯びた大きな月の昇りかけているのを認めた。空は鏡のように明(あか)いのでそれを遮(さえぎ)る堤と木立はますます黒く、星は宵の明星の唯(た)だ一つ見えるばかりでその他(た)は尽(ことごと)く余りに明い空の光に掻き消され、横ざまに長く棚曳(たなび)く雲のちぎれが銀色に透通(すきとお)って輝いている。見る見る中(うち)満月が木立を離れるに従い河岸(かわぎし)の夜露をあびた瓦(かわら)屋根や、水に湿(ぬ)れた棒杭(ぼうぐい)、満潮に流れ寄る石垣下の藻草(もぐさ)のちぎれ、船の横腹、竹竿(たけざお)なぞが、逸早(いちはや)く月の光を受けて蒼(あお)く輝き出した。忽ち長吉は自分の影が橋板の上に段々に濃く描き出されるのを知った。通りかかる(注9)ホーカイ節(ぶし)の男女が二人、「まア御覧よ。お月様。」といって暫(しばら)く立止った後(のち)、山谷堀の岸辺(きしべ)に曲るが否や当付(あてつけ)がましく、

〈書生さん橋の欄干(らんかん)に腰打(うち)かけて――

と立ちつづく小家の前で歌ったが金にならないと見たか歌いも了らず、元の急足で吉原土手(注10)の方へ行ってしまった。

　長吉はいつも忍会の恋人が経験するさまざまの懸念と待ちあぐむ心のいらだちの外に、何とも知れぬ一種の悲哀を感じた。お糸と自分との行末……行末というよりも今夜会って後の明日はどうなるのであろう。お糸は今夜兼てから話のしてある葭町(注11)の芸者屋まで出掛けて相談をして来るという事で、その道中をば二人一緒に話しながら歩こうと約束したのである。お糸がいよいよ芸者になってしまえばこれまでのように毎日逢う事ができなくなるのみならず、それが万事の終りであるらしく思われてならない。自分の知らない如何にも遠い国へと再び帰る事なく去ってしまうような気がしてならないのだ。今夜のお月様は忘れられない。一生に二度見られない月だなアと長吉はしみじみ思った。あらゆる記憶の数々が電光のように閃く。最初地方町の小学校へ行く頃は毎日のように喧嘩して遊んだ。やがては皆なから近所の板塀や土蔵の壁に相々傘をかかれて囃された。小梅(注12)の伯父さんにつれられて奥山(注13)の見世物を見に行ったり池の鯉に麩をやったりした。

　三社祭(注14)の折お糸は或年踊屋台へ出て道成寺(注15)を踊った。町内一同で毎年汐干狩に行く船の上でもお糸はよく踊った。学校の帰り道には毎日のよ

うに待乳山（まっちやま）（注16）の境内（けいだい）で待合せて、人の知らない山谷（さんや）（注17）の裏町から吉原田圃（よしわらたんぼ）を歩いた……。ああ、お糸は何故（なぜ）芸者なんぞになるんだろう。芸者なんぞになっちゃいけないと引止めたい。長吉は無理にも引止めねばならぬと決心したが、すぐその傍（そば）から、自分はお糸に対しては到底それだけの［　Ⅱ　］のない事を思返（おもいかえ）した。果敢（はかな）い絶望と諦（あきら）めとを感じた。お糸は二ツ年下の十六であるが、この頃になっては長吉は殊更（ことさら）に日一日とお糸が遥（はる）か年上の姉であるような心持がしてならぬのであった。いや最初からお糸は長吉よりも強かった。長吉よりも遥（はるか）に臆病（おくびょう）ではなかった。お糸長吉と相々傘にかかれて皆なから囃（はや）された時でもお糸はびくともしなかった。平気な顔で長（ちょう）ちゃんはあたいの旦那（だんな）だよと怒鳴（どな）った。去年初めて学校からの帰り道を待乳山で待ち合わそうと申出（もうしだ）したのもお糸であった。宮戸座（みやとざ）（注18）の立見（たちみ）へ行こうといったのもお糸が先であった。帰りの晩（おそ）くなる事をもお糸の方がかえって心配しなかった。知らない道に迷っても、お糸は行ける処まで行って御覧よ。巡査（おまわり）さんにきけば分るよといって、かえって面白そうにずんずん歩いた……。

　あたりを構わず橋板の上に吾妻下駄（あずまげた）（注19）を鳴（なら）す響（ひびき）がして、小走りに突然お糸がかけ寄った。

「おそかったでしょう。気に入らないんだもの、母（おっか）さんの結（ゆ）った髪なん

ぞ。」と馳(か)け出したために殊更(ことさら)ほつれた鬢(びん)を直しながら、「おかしいでしょう。」

(ウ)<u>長吉はただ眼を円くしてお糸の顔を見るばかり</u>である。いつもと変りのない元気のいいはしゃぎ切った様子がこの場合むしろ憎らしく思われた。遠い下町(したまち)に行って芸者になってしまうのが少しも悲しくないのかと長吉はいいたい事も胸一ぱいになって口には出ない。お糸は河水(かわみず)を照(てら)す玉のような月の光にも一向(いっこう)気のつかない様子で、

「早く行こうよ。私(わたい)お金持ちだよ。今夜は。(注20)仲店(なかみせ)でお土産を買って行くんだから。」とすたすた歩きだす。

「明日(あした)、きっと帰るか。」長吉は吃(ども)るようにしていい切った。

「明日帰らなければ、明後日(あさって)の朝はきっと帰って来てよ。不断着だの、いろんなもの持って行かなくっちゃならないから。」

待乳山の麓(ふもと)を(注21)聖天町(しょうでんちょう)の方へ出ようと細い路地(ろじ)をぬけた。

「何故(なぜ)黙ってるのよ。どうしたの。」

「明後日(あさって)帰って来てそれからまたあっちへ去(い)ってしまうんだろう。え。お糸ちゃんはもうそれなり向うの人になっちまうんだろう。もう僕とは会えないんだろう。」

「ちょいちょい遊びに帰って来るわ。だけれど、私(わたい)も一生懸命にお稽古(けいこ)

しなくっちゃならないんだもの。」

少しは声を曇(くも)らしたもののその調子は長吉の満足するほどの悲シュウ(エ)を帯びてはいなかった。長吉は暫(しばら)くしてからまた突然に、

「なぜ芸者なんぞになるんだ。」

「Ⅲ」

お糸は已(すで)に長吉のよく知っている事情をば再びくどくどしく繰返(くりかえ)した。お糸が芸者になるという事は二、三年いやもっと前から長吉にも能(よ)く分っていた事である。その起因(おこり)は大工であったお糸の父親がまだ生きていた頃(ころ)から母親(おふくろ)は手内職(てないしょく)にと針仕事をしていたが、その得意先(とくいさき)の一軒で橋場(はしば)(注22)の妾宅(しょうたく)にいる御新造(ごしんぞ)(注23)がお糸の姿を見て是非娘分(むすめぶん)にして行末(ゆくすえ)は立派な芸者にしたてたいといい出した事からである。御新造の実家は葭町(よしちょう)で幅のきく芸者家(げいしゃや)であった。しかしその頃のお糸の家(うち)はさほどに困ってもいなかったし、第一に可愛い盛(さかり)の子供を手放すのが辛(つら)かったので、親の手元でせいぜい芸を仕込ます事になった。その後(ご)父親が死んだ折には差当(さしあた)り頼りのない母親は橋場の御新造の世話で今の煎餅屋(せんべいや)を出したような関係もあり、万事が金銭上の義理ばかりでなくて相方(そうほう)の好意から自然とお糸は葭町へ行くように誰(た)れが強(し)いるともなく決(きま)っていたのである。百も承知しているこんな事情を長吉はお糸の口からきくために質問したのでない。お糸がどうせ

行かねばならぬものなら、もう少し悲しく自分のために別(わかれ)を惜しむような調子を見せてもらいたいと思ったからだ。長吉は自分とお糸の間にはいつの間(ま)にか互(たがい)に疎通しない(オ)感情の相違の生じている事を明(あきら)かに知って、更に深い悲(かなし)みを感じた。

　この悲みはお糸が土産物を買うため仁王門(におうもん)を過ぎて仲店(なかみせ)へ出た時更にまた堪えがたいものとなった。夕涼(ゆうすずみ)に出掛ける賑(にぎや)かな人出の中にお糸はふいと立止って、並んで歩く長吉の袖(そで)を引き、「長さん、あたいも直(じ)きあんな扮装(なり)するんだねえ。(注24)絽縮緬(ろちりめん)だねきっと、あの羽織……。」

　長吉はいわれるままに見返ると、(注25)島田に結(ゆ)った芸者と、それに連立(つれだ)って行くのは黒絽(くろろ)の紋付をきた立派な紳士であった。ああお糸が芸者になったら一緒に手を引いて歩く人はやっぱりああいう立派な紳士であろう。自分は何年たったらあんな紳士になれるのか知ら。(注26)兵児帯(へこおび)一ツの現在(いま)の書生姿がいうにいわれず情なく思われると同時に、長吉はその将来どころか現在においても、已(すで)に単純なお糸の友達たる資格さえないもののような心持がした。

　いよいよ(注27)御神燈(ごしんとう)のつづいた葭町の路地口(ろじぐち)へ来た時、長吉はもうこれ以上果敢(はかな)いとか悲しいとか思う元気さえなくなって、唯(ただ)ぼんやり、狭く暗い路地裏のいやに奥深く行先知れず曲込(まがりこ)んでいるのを不思議そうに覗込(のぞきこ)む

ばかりであった。
「あの、一イ二ウ三イ……四つ目の瓦斯燈の出てるところだよ。松葉屋と書いてあるだろう。ね。あの家よ。」とお糸はしばしば橋場の御新造につれて来られたり、またはその用事で使いに来たりして能く知っている軒先の燈を指し示した。
「じゃア僕は帰るよ。もう……。」というばかりで長吉はやはり立止っている。その袖をお糸は軽く捕えて忽ち媚るように寄添い、
「明日か明後日、家へ帰って来た時きっと逢おうね。いいかい。きっとよ。約束してよ。あたいの家へお出よ。よくッて。」
「ああ。」
返事をきくと、お糸はそれですっかり安心したものの如くすたすた路地の溝板を吾妻下駄に踏みならし振返りもせずに行ってしまった。その足音が長吉の耳には急いで馳けて行くように聞えた、かと思う間もなく、ちりんちりんと格子戸の鈴の音がした。長吉は覚えず後を追って路地内へ這入ろうとしたが、同時に一番近くの格子戸が人声と共に開いて、細長い弓張(注28)提灯を持った男が出て来たので、何という事なく長吉は気後れのしたばかりか、顔を見られるのが厭さに、一散に通りの方へと遠かった。円い月は形が大分小くなって光が蒼く澄んで、静に聳える裏通りの倉の屋根

の上、星の多い空の真中に高く昇っていた。

（略）

　学校はもう昨日から始っている。朝早く母親の用意してくれる弁当箱を書物と一所に包んで家を出て見たが、二日目三日目にはつくづく遠い神田まで歩いて行く気力がなくなった。今までは毎年長い夏休みの終る頃といえば学校の教場が何となく恋しく授業の開始する日が心待に待たれるようであった。そのういういしい心持はもう全く消えてしまった。つまらない。学問なんぞしたってつまるものか。学校は己れの望むような幸福を与える処ではない。……幸福とは無関係のものである事を長吉は物新しく感じた。

　四日目の朝いつものように七時前に家を出て観音（注29）の境内まで歩いて来たが、長吉はまるで疲れきった旅人が路傍の石に腰をかけるように、本堂の横手のベンチの上に腰を下した。いつの間に掃除をしたものか朝露に湿った小砂利の上には、投捨てた汚い紙片もなく、朝早い境内はいつもの雑沓に引かえて妙に広く神々しく寂としている。本堂の廊下には此処で夜明ししたらしい迂散な男が今だに幾人も腰をかけていて、その中には垢じみた単衣の三尺帯を解いて平気で褌をしめ直している奴もあった。この頃の空癖で空は低く鼠色に雲り、あたりの樹木からは虫噛んだ青いままの

木葉が絶え間なく落ちる。烏や鶏の啼声鳩の羽音が爽かに力強く聞える。溢れる水に濡れた御手洗の石が飜える奉納の手拭のかげにもう何となく冷いように思われた。それにもかかわらず朝参りの男女は本堂の階段を上る前にいずれも手を洗うためにと立止まる。その人々の中に長吉は偶然にも若い一人の芸者が、口には桃色のハンケチを啣えて、(注30)一重羽織の袖口を濡すまいためか、真白な手先をば腕までも見せるように長くさし伸しているのを認めた。同時にすぐ隣のベンチに腰をかけている書生が二人、「見ろ見ろ、(注31)ジンゲルだ。わるくないなア。」といっているのさえ耳にした。

　島田に結って弱々しく両肩の撫で下った小作りの姿と、口尻のしまった円顔、十六、七の同じような年頃とが、長吉をしてその瞬間危くベンチから飛び立たせようとしたほどお糸のことを連想せしめた。お糸は月のいいあの晩に約束した通り、その翌々日に、それからは長く葭町の人たるべく手荷物を取りに帰って来たが、その時長吉はまるで別の人のようにお糸の姿の変ってしまったのに驚いた。赤い(注32)メレンスの帯ばかり締めていた娘姿が、突然たった一日の間に、丁度今御手洗で手を洗っている若い芸者そのままの姿になってしまったのだ。薬指にはもう指環さえ穿めていた。用もないのに幾度となく帯の間から鏡入れや(注33)紙入を抜き出して、白粉をつけ直したり鬢のほつれを撫で上げたりする。戸外には車を待たして置いて

いかにも急(いそ)しい大切な用件を身に帯びているといった風(ふう)で一時間もたつかたたない中(うち)に帰ってしまった。その帰りがけ長吉に残した最後の言葉はその母親の「御師匠(おししょう)さんのおばさん」にもよろしくいってくれという事であった。まだ何時(いつ)出るのか分らないからまた近い中に遊びに来るわという懐(なつか)しい声も聞(きか)れないのではなかったが、それはもう今までのあどけない約束ではなくて、世馴(よな)れた人の(カ)如才(じょさい)ない挨拶(あいさつ)としか長吉には聞取れなかった。娘であったお糸、幼馴染(おさななじみ)の恋人のお糸はこの世にはもう生きていないのだ。路傍(みちばた)に寝ている犬を驚(おどろか)して勢よく駈(か)け去った車の後(あと)に、えもいわれず立迷った化粧の匂(にお)いが、いかに苦しく、いかに切(せつ)なく身中(みうち)にしみ渡ったであろう……。

（永井荷風『すみだ川』）

（注1）今戸橋……台東区浅草にあった橋。
（注2）慶養寺……台東区今戸にある曹洞宗の寺院。
（注3）山谷堀……隅田川から山谷にいたる掘割で、水路として活用されていた。現在は埋め立てられている。
（注4）尻端折……着物の裾をまくって帯に挟むこと。
（注5）請負師……土木や建築などの業務を請け負い、職人に割り振る仕

事の人。

（注6）日和下駄……主に晴天の日に履く歯の低い下駄。

（注7）長命寺……墨田区にある天台宗の寺院。

（注8）他分（たぶん）……多分。

（注9）ホーカイ節……法界屋と呼ばれる流しの芸人が、路上や門前で歌っていた曲。

（注10）吉原土手……隅田川の出水を防ぐために幕府が築いた日本堤の別称。

（注11）葭町……中央区の地名。現在の日本橋人形町。

（注12）小梅……現在の墨田区の一部の地名。

（注13）奥山……浅草寺本堂の北西一帯の通称。

（注14）三社祭……台東区浅草神社で毎年五月に行われる祭り。

（注15）道成寺……歌舞伎舞踊の一つである京鹿子娘道成寺のこと。

（注16）待乳山……台東区浅草にある丘。

（注17）山谷……台東区にあった地名。

（注18）宮戸座……浅草公園の裏にあった劇場で明治の終わりから大正にかけて人気があった。

（注19）吾妻下駄……台に畳表をつけた女性用の下駄。

（注20）仲店……仲見世。浅草寺参道にある商店街。
（注21）聖天町……浅草にあった町の名前。
（注22）橋場……台東区の町名。
（注23）御新造……他人の妻を敬っていう言葉。
（注24）絽縮緬……生糸で織られた薄手の織物。
（注25）島田……未婚女性や芸者などが結った髪型。
（注26）兵児帯……男性の普段着として使われる幅広の帯。
（注27）御神燈……芸者屋の入り口などにえんぎをかついで掲げた提灯。
（注28）弓張提灯……弓のように曲げた竹ひごを組んで作った提灯。
（注29）観音……聖観世音菩薩を祀（まつ）る浅草寺。
（注30）一重羽織……裏地をつけていない夏用の羽織。
（注31）ジンゲル……当時の学生言葉で芸者のこと。
（注32）メレンス……主に女性の和服の地に使われる毛織物の一種。
（注33）紙入……紙幣などを入れて持ち歩く入れ物。

問一　傍線(ア)「一しきり」とほぼ同じ意味の言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A　暫時　　B　速やかに　　C　痛烈に　　D　絶え間無く　　E　突然

問二　空欄 I にはいる①から⑤の文章について、どのような順番に並べ直すべきか。時間の推移を意識して考え、次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

①　堤の上に長く横わる葉桜の木立は此方の岸から望めば恐ろしいほど真暗になり、一時は面白いように引きつづいて動いていた荷船はいつの間にか一艘残らず上流の方へ消えてしまって、釣の帰りらしい小舟がところどころ木の葉のように浮いているばかり、見渡す隅田川は再びひろびろとしたばかりか静に淋しくなった。

②　遥か川上の空のはずれに夏の名残を示す雲の峰が立っていて細い稲妻が絶間なく閃めいては消える。

③　と見る間もなく初秋の黄昏は幕の下るように早く夜に変った。

④　流れる水がいやに眩しくきらきら光り出して、渡船に乗っている人の形をくっきりと墨絵のように黒く染め出した。

⑤　忽ち燈の光の消えて行くようにあたりは全体に薄暗く灰色に変色して来て、満ち来る夕汐の上を滑って行く荷船の帆のみが真白く際立った。

A　②—①—③—④—⑤

B　④—①—③—⑤—②

C　⑤—③—④—①—②

D　①―⑤―④―③―②

E　①―⑤―②―③―④

問三　傍線(イ)の部分から読み取れる長吉の態度や心情として、次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

Ａ　こんなに人通りの激しい場所をお糸との待ち合わせに選んだことを後悔している。

Ｂ　さっきからみすぼらしい風体のものしか通りがからないので、なんとなくつまらなく感じている。

Ｃ　自分は早めにやって来たのに、約束の時刻をだいぶ過ぎても現れないお糸のいい加減さに呆れている。

Ｄ　なかなか来ないお糸を待ちかねて、薄暗い橋向こうの人影に目を凝らしている。

Ｅ　どうして人の顔が見えない時分を待ち合わせ時刻に指定したのか、お糸の気持ちを測りかねている。

問四　空欄 Ⅱ にはどのような語句がはいるか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

A　思考力　　B　意志力　　C　説得力　　D　揚力
E　威力

問五　傍線(ウ)「長吉はただ眼を円くしてお糸の顔を見るばかり」だったのはどうしてか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

A　自分はお糸との行く末をくよくよ思い悩んでいたのに、お糸があまりに屈託がなかったから。
B　お糸との想い出の数々に我を忘れていたときに、思いもよらずお糸が駆け寄ってきて意外だったから。
C　いつものように元気で朗らかなお糸の様子があまりに魅力的で、思わず見とれてしまったから。
D　お糸が気に入っていないらしい結い上げた髪もよく似合っていて、別段おかしいとは思わなかったから。
E　幼馴染として一緒によく遊んでいたお糸の今夜の様子がすっかり大人びていて、普段とは違うように思われたから。

問六 傍線(エ)「シュウ」と同じ漢字を用いるものはどれか。次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A シュウ日野外で働く。
B 名人は勝つことにシュウ着していなかった。
C 決められたルートをシュウ回する。
D 前のやり方を踏シュウする。
E 思わずシュウ眉を開く。

問七 空欄 Ⅲ にはどのような語句がはいるか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

A 本当はなりたいわけじゃないけど、仕方ないじゃない。
B 家族のことを思っていやいや行くんだよ。
C 小さい頃からなりたかった事は知ってる筈。
D またそんな事きくの。おかしいよ。長さんは。
E きっとお稽古は、辛いでしょうねえ。

問八　傍線(オ)「感情の相違」とはどのようなものか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

Ａ　長吉がお糸にも少しは別れを惜しむそぶりをして欲しいと思っているのに、お糸はめそめそした長吉の態度を疎ましいと思っている。

Ｂ　お糸が芸者になって自分の町を去ることを長吉は深く悲しんでいるのに、お糸は自分の境遇の変化を喜んでいる。

Ｃ　お糸が前向きな気持ちで新生活に向かおうとしているのに、長吉はお糸の将来を懸念している。

Ｄ　お糸が芸者というのは華やかで魅力的な職業だと思っているのに、長吉は卑しく恥ずかしい商売だと考えている。

Ｅ　お糸が芸者の華美な衣装や豊かな生活に憧れているのに対して、長吉はもっと堅実な生活にこそ価値があると考えている。

問九　傍線(カ)のように、長吉がお糸の言葉を「如才ない挨拶」としか聞き取れなかったのはなぜか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

A　芸者として一人前になるまではそうそう遊びに来る余裕がないことは明らかなのに、調子のいいことを言っているから。

B　お糸の表情や口ぶりから、本気で遊びに来る気も、長吉に対する関心もないことを勘づいたから。

C　突然お糸が自分よりはるかに大人びて、要領よく世の中を渡っていける人間に変わってしまったように思えたから。

D　お糸が長吉よりも、自分の母である「お師匠さんのおばさん」の方を気にかけているのがわかったから。

E　まだ十六なのに着飾って化粧をしていたり、一時間経たないうちに早々に帰ってしまったりと、態度に軽薄なものが感じられたから。

問十　この文章から読み取れる長吉の性格や心情として適切でないものはどれか。次の中から一つ選び、記号で答えよ。

Ａ　とても感じやすい反面、自分の感情に溺れてしまって、相手の立場にまで思い至らない幼さがある。

Ｂ　繊細で感受性が豊かだが、気が弱く人目を気にしがちであり、自分の気持ちを貫き通せないでいる。

Ｃ　芝居でもいいからお糸に悲しむふりをして欲しいと思うように、客観的な事実よりもその場の感情を重んじるところがある。

Ｄ　子供の頃の淡い恋愛関係を愛おしむあまり、成長していくお糸の姿に嫉妬と焦りを感じている。

Ｅ　世間知らずのお坊ちゃんのために、お糸の置かれた境遇を理解できず彼女の冷淡さに戸惑っている。

問十一　この文章から読み取れるお糸の性格や心情として、次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

Ａ　明るく物怖じしない性格だが、その場の気分や周囲の勧めに流されて、自分から考えようとしないところがある。

Ｂ　一見明るいお転婆娘のようだが、実のところ貧しさゆえ自分で未来を選べないことにやりきれない思いを抱えている。

Ｃ　長吉が自分に好意を持っている事は十分気がついているが、どうせ結ばれない身の上なので、あえて知らぬふりを装って、悲しみに耐えている。

Ｄ　気が強いところがありながら、親や親戚に頼まれると嫌とは言えないところがあり、長吉の気持ちもわかるだけに心苦しく思っている。

Ｅ　慎重で考慮深く、様々な条件を取捨選択しながら、情に流されることなく最善の道を選ぶ賢さがある。

問十二 この文章の表現技法上の特徴はどのようなものか。次の中から最適のものを選び、記号で答えよ。

Ａ　無骨だが力強い文章で、隅田川べりの江戸情緒の残る風景や貧しいながらたくましく生活している庶民の姿を生き生きと描き出している。

Ｂ　奇想天外な表現を多用しつつ、物事に新たな照明を与えることで、まだ若い二人の心情を、意外な角度から照らし出している。

Ｃ　暮れてゆく水辺の街の情景や幼馴染と離別する主人公の悲しみやためらいを、流麗で格調高い文章で活写している。

Ｄ　簡潔だが隙のない分析的な文章であり、登場人物の心理を鋭利なメスのように見事に解剖してみせている。

Ｅ　句点の少ない長文が切れ目なく続くことで、独特のリズムを作り出し、長吉の心に渦巻く感情を力強く表現している。

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七	問八	問九	問十	問十一	問十二

第四講　傍線部内容説明問題解法　30分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

A 論理についてわれわれは三つの次元を考えることができる。ひとつは論理学で問題とする形式論理である。多くの日本人は知識としてこの論理を知ってはいても、生活には融けこんでいない。何かひどく冷たいもののように感じている。それによってものを考え表現することはむしろまれであろう。

もうひとつは、日本語に即した論理で、これは日本語を使っているときには多少ともたえず作用しているはずのものであるが、ほとんど意識されることがない。しいてとりだすならば形式論理とはちがった不定形で柔か味のある道理とか筋道のようなものとなるであろう。さらに、この硬軟二つの論理の間に、和訳文の論理が考えられる。これは、外国語と母国語を比較して外国語の発想と表現が母国語といちじるしくちがうという実感にもとづく、比較論理とも言うべきものによって育てられる論理の意識である。明治以来の知識人のいだいてきた論理コムプレックスもこれに根ざし

ているのである。わが国における外国語学習者の数が激増してほとんどすべての国民が外国語を学ぶ経験をもつようになっている現在、外国語に内包されている論理と母国語の無意識的論理との摩擦で生じるこの第三の論理の重要性はいよいよ大きくなりつつあるように思われる。

　ここでは、形式論理は一応問題から外して、日本語に即して認められる論理を中心に、翻訳を媒介として認められる比較論理の問題も加味して考えて行くことにしたい。

　日常の言語活動における論理は、話の筋道といったごくインフォーマルなものである。どんな場合でも、言葉に筋道が通っていなければ、伝達は成立しようがない。「筋」とか「筋道」とかいう語が示しているように言語に内在する論理性は何か「線」のようなものと感じられているのが普通である。

　表現の受け手はこの言葉の筋道をたどりながら理解を進めて行くわけだが、送り手との間の心理的関係の親疎によって筋道の性格も変ってくる。送り手と受け手が未知の人間であるような場合、筋道はしっかりした線状をなしていて、受け手がそれから脱落しないようになっていなくてはならない。論理は密でなくてはならないのである。その典型的な例は法律の表現で、ここでは受け手がときとしてはまったく対立する観点に立っている

ことがある。したがってB表現の道筋はあくまで太くしっかりしたものである必要がある。かりにもその筋を外した解釈が可能であっては不都合がおこるからである。多くの人々が法律の条文を(ア)うるさいものと感じるのは偶然ではない。送り手が受け手を信頼していないのである。法律でなくても、受け手の連帯感が保証されていないとき、C表現は念には念を入れて、誤解のおこらないように配慮されたものになる。緊密な論理はその結果にすぎない。

　これと反対に、受け手がごく身近かに感じられているときの表現はわかりきったことをくどくどと説明する必要がない。要点だけをかいつまんでのべるだけで誤解も生じない。言語の冗語性も小さくてすむのである。一般にお互いが熟知しているような集団の内部においては形式的論理はむしろ(1)ケイエンされる。その代表的な例は家族同士の会話である。第三者が聞けば何のことかまるでわからぬような省略の多い(2)ヒヤクした言い方をしているが、それでけっこう話は通じ合っている。形式論理から見れば没論理と言えるかもしれないが、まったく論理を欠いているというわけでもないであろう。［甲］別種の論理が作用していると見るべきである。

　相互によく理解し合っている人間同士の伝達においては言葉の筋道はつねに完全な線状である必要はないことが多い。要点は注目されるが、それ

以外の部分はどうでもよい。(イ)等閑に付されたところはやがて風化がおこるであろう。こうして、方々が風化して線に欠落ができると、線的な筋が点の列になって行く。D親しいと感じ合っている人たちの間の言語における論理は線ではなくて点の並んだようなものになっている。

　人間には、こういう点をつなげて線として感じとる能力がだれにもそなわっているのである。乙、点的論理が了解されるところでは線的論理の窮屈さはヤボ(3)なものとして嫌われるようになる。なるべく省略の多い、丙、解釈の余地の大きい表現が含蓄のあるおもしろい言葉として喜ばれる。点を線にするのは一種の言語的創造をともなうからであろう。点の線化は昔の人が星の点を結び合わせて図形を読みとり、名を冠して星座をつくりあげたことなどにもあらわれている。

　日本語はヨーロッパの言語が陸続きの外国をもった国で発達したのとちがって、島国の言語である。同一言語を同一民族が長い期間にわたって使っていれば、相互の了解度はきわめて高くなる。家族語におけるような論理が社会の広い範囲に流通していると考えてよい。そういう日本語の論理は線的性格のものではなくて、点的性格の方がよく発達しているのは自然のことである。念には念を入れた、がっちりした構成の表現はむしろ重苦しいものと感じられる。上手な人のうつ囲碁の石のように一見は飛んで

いるようであっても、その点と点を結び合わせる感覚が下敷きになっているときは決して非論理でも没論理でもなく、りっぱに「筋」をもっているのである。

　日本語が論理的でないように考えられるのは、ヨーロッパ語の線的論理の尺度によって日本語をおしはかるからである。成熟した言語社会の点的論理を認めるならば日本語はそれなりの論理をもっていることがわかる。よく引き合いに出される禅にしても、点的論理の概念をとり入れることによって、その独自の論理性は充分合理的に説明できるはずである。また、E俳句の表現もいわゆる論理、線状の論理からは理解しにくいものであるが、点的論理の視点からすればきわめて興味あるものになる。考えようによっては、点的論理がよく発達した言語社会だからこそ俳句のような短詩型文学が可能になったのだと言うこともできる。

（外山滋比古『日本語の論理』。ただし、本文に一部省略がある。）

問一　傍線部(1)～(3)の片仮名の部分と同じ漢字を使うものをそれぞれ一つずつ選び、数字で答えよ。

(1)　ケイエン
1　ケイヤク書にサインする
2　新聞にケイサイする
3　日本文化にケイトウする
4　社長の実行力にケイフクする

(2)　ヒヤク
1　ヤクワリを分担する
2　面目ヤクジョ
3　ヤクミを入れる
4　ヤクソクを果たす

(3)　ヤボ
1　フンボを発掘する
2　憧れの人にレンボする
3　おセイボを贈る
4　チョウボをつける

問二　傍線部(ア)と(イ)の本文中の意味として最も適切なものをそれぞれ一つずつ選び、数字で答えよ。

(ア)　うるさい

1　複雑でわずらわしい
2　難解で理解しがたい
3　耳障りで困る
4　長すぎて読みにくい

(イ)　等閑に付された

1　均等に取り扱われた
2　ほどほどに注意を向けられた
3　徐々に忘れられた
4　特に気にも留められなかった

問三　傍線部A「論理についてわれわれは三つの次元を考えることができる」とあるが、その三つとは何か。最も適切な組み合わせを一つ選び、数字で答えよ。

1　形式論理――母国語の無意識の論理――不定形で柔か味のある論理
2　形式に即した論理――日本語に即した論理――硬軟二つの論理
3　形式論理――日本語に即した論理――和訳文の論理
4　形式論理――比較論理――和訳文の論理

問四　傍線部Ｂ「表現の道筋はあくまで太くしっかりしたものである必要がある」とはどういうことか。最も適切なものを一つ選び、数字で答えよ。

1　誰からみても中立的な立場で事実にそくした内容を正確に表現する必要がある。
2　難しい法律用語を使った情報量の多さに不満が出ないように表現する必要がある。
3　不特定多数の人間が読んでも理解できるように分かりやすく丁寧に表現する必要がある。
4　疑いをもたれないようにあらゆることを想定して過不足なく明確に表現する必要がある。

問五　傍線部Ｃ「念には念を入れて」に最も近い意味の慣用句を一つ選び、数字で答えよ。

1　急がば回れ　2　石橋をたたいて渡る　3　念ずれば通ず
4　転ばぬ先の杖（つえ）

問六 空欄 甲 、 乙 、 丙 に入る語の組み合わせとして最も適切なものを一つ選び、数字で答えよ。

1 したがって――むしろ――言いかえると
2 したがって――言いかえると――むしろ
3 むしろ――したがって――言いかえると
4 むしろ――言いかえると――したがって
5 言いかえると――むしろ――したがって
6 言いかえると――したがって――むしろ

問七　傍線部Ｄ「親しいと感じ合っている人たちの間の言語における論理は線ではなくて点の並んだようなものになっている」とはどういうことか。最も適切なものを一つ選び、数字で答えよ。

1　親しい人間同士では疑問の生じない明確な情報伝達よりも、あいまいな言葉の表現が好まれること。

2　親しい人間同士は普段からお互いを知り尽くしているので、何も言わなくても理解しあえること。

3　親しい人間同士でも時間の経過とともに疎遠になり、最後は出会った時点の思い出が残ること。

4　親しい人間同士だと、細かな説明もなく要件だけを伝えれば、お互いに十分理解しあえること。

問八　傍線部Ｅ「俳句の表現もいわゆる論理、線状の論理からは理解しにくいものであるが、点的論理の視点からすればきわめて興味あるものになる」を説明したものとして最も適切なものを一つ選び、数字で答えよ。

1　俳句の論理は、簡略化されているため読み手の側に言語的創造が許されている。

2　俳句は、文章としての表現形式よりも単語のもつ音声的リズムを特に重視している。

3　俳句は、西洋語に翻訳できない日本語独特の論理に基づく文法が反映されている。

4　俳句の作り手は、読み手にいつも親しみを感じているので表現を簡略化している。

問九　本文の内容と合致しないものを一つ選び、数字で答えよ。

1　ほとんどの日本人が外国語を学ぶようになったことにより、それまでになかった論理的な文章を認識し、それを学ぶようになった。

2　点的論理の背後には線的論理が隠れていているが、日本人はそのことに気づかず、日本語は線的論理にはそぐわない言語だと思っている。

3　日本人は点的論理を重んじるが、これは線的論理と全く切り離されたものでなく、受け手側に言語を統合する能力があることが前提となっている。

4　西洋人の線的論理にせよ、日本人の点的論理にせよ、これらは情報の送り手と受け手の信頼関係の度合いによって形成された相対的なものである。

問一

(1)

(2)

(3)

問二

(ア)

(イ)

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

第五講　傍線部理由説明問題解法　30分

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

都市は、巨大な権力がその目的を達成する拠点として、そこに多種多様な権力が集積することによって、さまざまな施設をもつ場所として建設された。したがって、都市はそうした施設を作り出すだけの能力をもつ権力の担い手が必要と判断すれば、どこにでも建設された。(1)

都市が紀元前八〇〇〇年や前六五〇〇年に遡(さかのぼ)るイェリコ(注1)やチャタル・ヒユクの時代から現在にいたるまで〈歴史貫通的〉に存在するのは、その成立基盤が「権力」にあったからである。また、都市が洋の東西を問わず〈通文化的〉に地球上のいたるところで建設されたのも、都市の成立基盤が「権力」にあったからである。多種多様な目的をもって活動する権力は、絶対的余剰(注2)農産物のない農村からでも〝社会的余剰農産物(注3)〟を作り出したのである。(2)

[ア] Ⅰ都市はそれぞれが個性をもっており、どれひとつとっても同じものはない。なるほど、都市は先に指摘したように、歴史貫通的、通文化

的存在である。それにもかかわらず、都市がそれぞれの「時代」や「文化」を無視しては考えられないのもまた、都市の中核をなすのが権力であるという、その同じ事実によっている。権力の構成のされかたは時代や文化によって、実に多様なものとなっている。(3)

都市は――その都市的定住を惹起(じゃっき)している主要な権力が政治、経済、宗教など何であれ、またその組織形態がいかなるものであれ――権力の拠点として、農村と比べてはるかに豊かな生活を営む場所となっていた。都市の繁栄がしばしば国家の繁栄と二重がさねにして語られるのも、経済的権力をはじめ都市の多種多様な権力の活動には、何らかのかたちで安全を保障する国家権力を必要としたからである。(4)

[Ⅱ]ローマの繁栄がローマ帝国の繁栄として語られたり、長安の繁栄が唐帝国の繁栄として語られたり、バグダッドの繁栄がアッバース帝国の繁栄として語られたりするのは、このためである。(5)

ところで、安全の確保が人間の生活に欠かせない以上、人びとは多大な犠牲を払ってでも防衛に努めなければならなかった。そのため人びとは都市の周囲に城壁を廻らしたり、国境に[a]ヨウサイを建設したり、膨大な常備軍を配置したりして、万一に備えてきた。防衛にともなう人的、物的資源の動員は、都市を活気づける。しかしその負担は人びとに[X]される

しかない。軍備は都市を活気づけるとともに、人びとの生活を徴税や徴兵を通じて圧迫していく。防衛が人びとの活動に足枷（あしかせ）をはめるのは、都市の周囲の城壁や国境といった物理的な施設ばかりではなかった。軍備は人びとの生活に容赦なくのしかかっていった。軍備は都市の［Ⅰ］にも、［Ⅱ］にも寄与したのである。(6)

　巨大な軍事支出はかえって国家を圧迫する。冷戦下における米ソの軍拡競争はとどまるところをしらなかった。はてしない軍拡競争は、両国の経済を水面下で蝕（むしば）んでいった。軍拡競争はソヴィエト崩壊の大きな要因ともなったのである。その一方、軍拡競争はその勝者となったはずのアメリカにも後遺症を残している。(7)

　大規模な戦争ともなれば、どこの国でも国家の興亡をかけた一大行事となる。Ⅲ戦争は大量の人的、物的資源を動員する点で、すぐれて都市的行為である。勝利に必要な物資の調達に国境はない。このため戦争は軍事物資の供給を通じて、他国の都市を活気づけた。朝鮮戦争は朝鮮の都市を破壊する一方で、太平洋戦争で破壊された日本の都市を急激に復興させた。また、ベトナム戦争はベトナムの都市を破壊し、アメリカの都市を疲弊させる一方で、日本や韓国の都市をｂウルオした。これまで隣国間での戦争は、直接の被害に巻き込まれない限り、歓迎すべきことですらあったのである。

(8)［イ］、こうした状況を一変させたのが、湾岸戦争である。アメリカはその費用を、戦争当事国でない国にまで課したのである。日本は米英に一三〇億ドルを拠出させられるにいたった。(9)

とはいえ、都市に軍備が必要なことは改めていうまでもないだろう。[Ⅳ]都市での飢餓の発生が戦争と密接に関係しているのも、戦争が都市の諸権力の安定した活動を背後で保障している国家権力を破壊するからである。都市は戦争ならずとも、都市を構成している権力の人的、物的資源の統合能力が総体として低下すると、衰退していった。(10)

都市は権力の拠点として繁栄の場でなければならなかった。そうでなければ、そもそも人間がその建設と維持に膨大な負担や犠牲をともなう都市を生み出す必要はなかった。歴史家F・ブローデル(注4)が、古今東西の都市を比較検討した結果、都市が建設されるのは、いま以上によい生活とは何かという場合にかぎられ、この規則に例外はないというのも、都市は人間が快適な生活を営むために形成されたものだからである。(11)

都市が農村より豊かな生活を営む場所であるかぎり、人びとは、都市が劣悪な環境をもつ「墓場」や「蟻(あり)地獄」であろうと、都市に集まってきた。疫病や火災などの危険は人びとにとって、しょせん[c]グウハツ的なもの

でしかない。都市には豊かな生活をキョウジュ[d]するチャンスがあった。このため都市には、権力者が必要とする以上の人間が集まってきた。しかし都市が過剰な人口を抱えることは都市の活力の源泉となる一方で、社会不安の種ともなった。そこにはさまざまな対立や抗争がもちあがったのである。［ウ］、権力はできるだけ不必要な人間の都市への居住を制限しようとした。それでも、人びとはそうした制限の隙を見つけては、都市へ流入していった。ところが、都市民の暴動は農民の暴動と違って、国家にとって危険きわまりないものである。こうしたことから、古来、国家は農民の都市への人口流入を避けるため、しばしば都市人口の地方への分散を試みてきた。[V] ⑿

古代ギリシア人の地中海や黒海沿岸への植民活動は有名である。神託を経て行われた植民地の建設は、あくまで宗教的信念にもとづいた自発的行動という形をとった。しかしギリシア人の大植民行動の背後には、何といっても人びとの土地へのカツボウ[e]があった。かれらは各地で自分たちのポリス(注5)を建設していった。ポリスの人口は植民によって調節されていたのである。⒀

余剰人口の増大は不必要な軋轢（あつれき）を生み出す。わけても都市の過剰人口は危険であった。かれらはしばしばフオン[f]な動きをする。江戸は幕藩体制の

拠点として発展するにつれ、「江戸にいけば食べられる」として、諸国から多くの人たちが集まってきた。⒁

（注6）荻生徂徠は治安対策の側面から、無制限に膨張していく江戸に警鐘を鳴らした。江戸には農村からの流民が集まり過ぎ、一旦ことがあると江戸城の安全すら脅かしかねなかった。かれの目には、江戸の余剰人口が幕府を動揺させかねない、危険このうえないものと映っていた。そして徂徠の死後四年目にして、暴動は現実のものとなったのである。⒂

資本主義の発展で、都市は未曾有の規模にまで膨張した。都市には、大量の労働者が産業化が生み出す富の分け前に与ろうと流入していたのである。しかし資本主義的企業は政治権力や宗教権力によって構成された機関以上に、興亡を繰り返した。資本主義的企業の盛衰にともなって、都市には大量の失業者が生み出されたのである。都市の過剰人口は〝失業〟という形態をとった。Ⅵ資本主義下における都市は労働運動の舞台となるのである。⒃

産業化による社会の流動化は、伝統的な人口抑制からの解放を意味する。ヨーロッパ諸国は産業化と衛生状態の改善で、人口が急増した。その勢いは、未曾有の膨張を続ける都市でも呼吸できなかったのである。このためヨーロッパから数千万人にのぼる人びとが、新大陸や植民地へと移住して

いった。(17)

　農民が都市に流入しようとしたことは、共産主義国でも同じであった。ソヴィエトでも、都市は権力の担い手が住むところであった。しかも共産主義は計画経済が必要とする以上の人びとを都市に配置しようとはしなかった。それどころか、スターリン(注7)にいたっては、大土木工事やシベリアでの鉱山開発に必要な労働力を確保するために、余剰人口を次々と政治犯に仕立て上げていったのである。かれらの「収容所」(ラーゲリ(注8))は、地方開発の拠点となった。(18)

　共産主義国では、都市の余剰人口が計画経済の足枷となるものとして排除された。その結果、都市と農村との格差は縮小するどころか、かえって拡大していった。資本主義国では、都市は貧民の流入で豊かさが〈平均化〉するのに対して、貧民の流入を規制する共産主義国では、都市と農村の格差が資本主義国にも増して、一層大きなものとなったのである。(19)

（藤田弘夫『都市の論理』）

注1　イェリコやチャタル・ヒユク……イェリコはパレスチナ東部に位置する都市で、紀元前八〇〇〇年の時代の集落遺跡が発掘されている。チャタル・ヒユクはトルコ共和国コンヤ市南東部にある紀元前

六五〇〇年前後の都市遺跡。

2　絶対的余剰農産物……農村において、自家消費分を差し引いた後に残る農産物のこと。

3　社会的余剰農産物……農村において、自家消費分を削ってでも都市の需要に応じて供給することになる農産物のこと。

4　F・ブローデル……（一九〇二～一九八五）フランスの歴史学者。

5　ポリス……古代ギリシアの都市国家。

6　荻生徂徠……（一六六六～一七二八）江戸時代の儒学者。「死後四年目」の一七三二年に大飢饉が起こった。

7　スターリン……(一八七八～一九五三)ソヴィエト連邦共産党指導者。

8　ラーゲリ……ロシア語で収容所、キャンプを意味する。

問一 空欄ア・イ・ウに入ることばとして最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。

ア ①したがって ②ついに ③まして ④もしくは ⑤しかし

イ ①ところが ②そもそも ③そのため ④いわんや ⑤ついに

ウ ①けれども ②さらには ③したがって ④あるいは ⑤つまり

問二 空欄Xには「租税などを割り当てて負担させる」という意味のことばが入る。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①負荷 ②付加 ③賦課 ④担保 ⑤負債

問三　空欄Ⅰ・Ⅱに入ることばの組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① Ⅰ建設・Ⅱ犠牲
② Ⅰ施設・Ⅱ生活
③ Ⅰ安全・Ⅱ生活
④ Ⅰ生活・Ⅱ防衛
⑤ Ⅰ発展・Ⅱ衰退

問四　傍線部a・b・c・d・e・fを漢字に改めた場合、これと同じ漢字を用いるものを、次の中から一つずつ選べ。

a　ヨウサイ

① 景気フヨウ策を練る
② シュウヨウを積む
③ ヘイソクした時代
④ サイガイ救助
⑤ サイシンの注意を払う

b　ウルオ

① 条約をヒジュンする
② ジュンシンな気持ち
③ ヒョウジュン的な体格
④ 館内をジュンカイする
⑤ ジュンカツ油

c　グウハツ
① 事件にソウグウする　② グウスウ月
③ リュウグウ城　④ リハツ店　⑤ 子どものハツゼック

d　キョウジュ
① キョウジュンの意を表する　② 他人の考えにキョウメイする
③ キョウラク的な生活　④ 大企業がキョウゴウする市場
⑤ 大きなハンキョウを呼ぶ

e　カツボウ
① カッスイ対策をする　② 国土交通省がカンカツする土地
③ 部下を大声でイッカツする　④ カッショクの肌
⑤ 意見をソウカツする

f　フオン
① フツウ選挙　② 国家のフチンにかかわる大事
③ オンネンを抱く　④ オンケンな思想
⑤ オンダンな気候

問五　本文中の段落の末尾から次の文が脱落している。この文の入るべき最も適切な段落を、次の中から一つ選べ。

このことは、現代でも同じである。東京の繁栄は経済大国日本の繁栄として、ソウルの繁栄は韓国の繁栄として語られている。

① 第(3)段落　② 第(5)段落　③ 第(7)段落
④ 第(9)段落　⑤ 第(11)段落

問六　本文はその内容から考えて、前半と後半の二つにわけることができるが、後半が始まるのは第何段落目からか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① 第(8)段落　② 第(10)段落　③ 第(12)段落
④ 第(14)段落　⑤ 第(16)段落

問七　波線部Ⅰ「都市はそれぞれが個性をもっており、どれひとつとっても同じものはない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① 巨大な権力がその目的を達成するために、どこでも同じように都市にさまざまな施設を建設するため

② 巨大な権力がその目的を達成するために、多種多様な担い手たちが活動するため

③ 都市の中核をなす権力が、歴史貫通的、通文化的な存在であるため

④ 都市の中核をなす権力の構成が、時代や文化によって多種多様であるため

⑤ 権力の拠点として、都市は農村よりも豊かな生活を営む場所であるため

問八　波線部Ⅱ「ローマの繁栄がローマ帝国の繁栄として語られたり」とあるが、そのように語られるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　都市の多種多様な活動は、何らかのかたちで国家権力によってその安全が保障されているから

②　都市の多種多様な活動は、時代や文化によって構成されており、そこに個性がうまれるから

③　都市はその国家が豊かな生活を営むという目的のために建設した唯一の首都であるから

④　都市はどこでも国家権力によって建設されるが、歴史貫通的、通文化的な存在であるから

⑤　都市はそれぞれ個性をもっており、ローマにはローマ帝国の特徴が二重がさねされているから

問九　波線部Ⅲ「戦争は大量の人的、物的資源を動員する点で、すぐれて都市的行為である」とあるが、それはどのような意味か。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① 戦争とは、隣国の都市から大量の軍事物資を調達し、自国の農村を疲弊させて都市を豊かにするものである。

② 戦争とは、たとえ人びとの生活を圧迫し、軍拡競争は止められないのだとしても、人間の生活には欠かせないものである。

③ 戦争とは、都市の繁栄を目的とする国家権力が都市の安全を確保するためには、いかなる犠牲を払っても必要な行為である。

④ 戦争とは、国家の興亡をかけた一大行事であり、当事国のみならず隣国にも軍事費用を負担させて疲弊させるものである。

⑤ 戦争とは、大量の人的、物的資源の供給を通じて、自国に活気と疲弊をもたらす一方で、当事国ではない他国の都市をも活気づけるものである。

問十　波線部Ⅳ「都市での飢餓の発生が戦争と密接に関係している」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　戦争によって都市が繁栄しなくなると、農村部からの食料供給がうまくいかなくなるため

②　戦争によって戦争当事国ではない国にまで膨大な軍事費用を拠出させることで、多くの国家権力が破壊されるため

③　戦争によって国家権力が破壊されると、人的、物的資源の統合能力が低下して都市の生活は衰退していくため

④　都市とは権力の拠点として、人間が快適な生活を営むために膨大な負担や犠牲を払って形成されるものであるため

⑤　都市とは古今東西のすべての都市において例外なく、いま以上によい生活とは何かを求めて建設されたものであるため

問十一　波線部Ⅴ「しばしば都市人口の地方への分散を試みてきた」とあるが、なぜそのようなことを行ってきたのか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　都市が過剰な人口を抱えることは、活力の源泉となる一方で、国家権力を脅かす都市民の暴動に結びつくから

②　都市が過剰な人口を抱えることは、社会の流動化を停滞させて、地方の繁栄を妨げるから

③　都市が豊かな生活を営む場所であるかぎり、農村の人びとは制限の隙を見つけては都市に流入してくるから

④　国家は宗教的信念にもとづいた自発的行動として、土地を求めて地中海や黒海沿岸に植民地を建設するから

⑤　国家は地方に新たな植民地を建設することで、都市に必要のない過剰な人口を計画的に調節するから

問十二　波線部Ⅵ「資本主義下における都市は労働運動の舞台となるのである」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① 資本主義の発達により都市が膨張し、大量の労働者が豊かさを求めて農村から都市へと流入してくるため
② 資本主義的企業の興亡によって都市には大量の失業者が生み出され、対立や抗争が引き起こされるため
③ 無制限に膨張する都市では、農村からの流民によってその国家権力を破壊してしまうほどの暴動が引き起こされるため
④ 植民地への人口分散によって都市は人口を調整でき、労働者の繁栄を実現するすばらしい場所となるため
⑤ 資本主義の発達による産業化は社会の流動化を招き、労働者たちによる共産主義の計画経済が優位となるため

問十三　本文の内容と**合致しないもの**を、次の中から**二つ**選べ。

① 都市の繁栄はしばしば国家の繁栄を二重がさねにして語られてきた。
② 都市は、権力が必要と判断すれば、権力の目的達成のためのさまざまな施設をもつ拠点としてどこにでも建設された。
③ 都市にとって安全の確保は繁栄のために必要ではあるが、それは人びとの生活を圧迫するものでしかない。
④ 都市はたとえ戦争でなくても、基盤となる権力の人的、物的資源の統合力が失われれば衰退してしまうものである。
⑤ 都市にとって余剰人口の増大は不必要な軋轢を生みだし、基盤となる権力を破壊するような危険性につながる。
⑥ 資本主義国では都市への貧民の流入は、都市と農村との格差を増大させ、共産主義国では富を平均化させた。

問一

ア
イ
ウ

問二

問三

問四

a	d
b	e
c	f

問五

問六	問七	問八	問九	問十	問十一

問十二

問十三

第六講　空所補充問題解法　30分

次の文章を読み、後の問に答えよ。

日本の庭を「時の庭」と私が呼ぶとき、そこには必ずしも廻遊式庭園だけが思い浮べられているのではない。空間的規模において、修学院離宮といえども、ヴェルサイユとは到底比較にならないが、いかにひろくても一定の限定された空間に他ならぬ庭園というものは、そこに世界を包摂するという目的と、同時に、そこを足がかりにして世界を離脱するという目的とを、双つながら含んでいると考えられ、その相反する二つの目的のニュアンスの濃淡によって、西洋庭園のさまざまなスタイルの変遷があらわれたにしても、そこに何ら「時間」の要素を導入しなかった、ということが、西洋庭園の大きな特色であるように思われる。

水の使用法一つにしても、滝や渓流は、噴水と本質的にちがっている。噴水はいわば水の［ 1 ］であって、水は或る形に固定されて、しかも自然ではめったに見られない整合的な姿で空中に浮んでいる。滝や渓流は流れている。又、日本庭園に多用される池も、滝によって水を供給され、渓

流へ導かれて橋を架せられる。[2]橋が又、建築におけるもっとも時間的な要素である。

造園術において、政治学的な比較も亦（また）、芸術的哲学的比較と同様に有効であるにちがいない。仙洞御所では、上皇というものの特殊な政治的位置と、この庭の構造とは、わざと巧まれたもののように似合っている。もし上皇という地位が、ヴェルサイユの庭のような壮大明晰（めいせき）な統治の図式に日々直面していたら、その地位自体が甚だ変ったものになったかもしれないのである。

それを別としても、日本の造園術には、寝殿造の庭のような円満な遊興形式にせよ、中世以降の隠遁者（いんとんしゃ）流の庭にせよ、権力そのものの具現であるような庭の形式をかつて知らなかった。庭が安息であり、権力否定の場であることは、金をかけた庭ほど目ざしているところのものであり、それは[3]精妙な偽善の技術とさえ見えるのである。

空間を無限に拡大し、その空間をさまざまな建築的資材で構築し、シンメトリカルに区分し配列する西洋の庭は、空間構築自体による世界離別の傾向を秘め、それがバロックを生んだとも言えるであろう。又、純正ルネッサンスの平面的構造は、いかにひろい空間であっても、空間を理性的空間としてとどめるラテン的理想を表現して、秩序をして完全な可視的な秩序

たらしめ、世界包摂の雛型（ひながた）を生み出した。

しかし、時間を庭へ導入することを、西洋の造園術は思いつかなかった。もし時間の原理を導入すれば、形態は腐蝕（ふしょく）され、秩序は崩壊し、モニュメントは無効になるであろうからである。立木はたえず時間の影響をうけて変形するので、その刈り込みは庭師の多忙な仕事であったが、樹々は配列も形態も、彫刻同様にはっきり反［4］的なものであらねばならなかった。

庭がどこかで終る、庭には必ず果てがある、という観念は、西洋の専制君主にとっては、我慢ならぬものであったに相違ない。そのためには、空間を支配し、空間を構造で埋めなければならぬ。ヴェルサイユの庭はその極致である。

私は冬のきわめて寒い日に、ヴェルサイユを訪れたときのことを思い出す。庭は謁見の間から見渡されたが、気が遠くなるような壮大な規模で、いざ庭へ下りてみると、どこへ行くにも何キロという距離は、歩く疲労そのものよりも、歩くにつれて募る寒気のために、身をすくませてしまう。宮殿のテラスから、ラトヌ女神の彫像のある大水盤のまわりを歩くだけで、人間の庭の規模とは思えぬほどであるから、彫刻群と木立に左右を囲まれた巨大な芝生絨毯（じゅうたん）の傍らをすぎ、その絨毯の連続としての大運河の、ど

こまでつづくとも知れぬ川岸をゆくときには、寒気に体は凍りつくようになって、こんな大空間を、自動車もない時代の人間が使いこなしたことは、[5]われわれの及ばぬ精力のように想像される。

しかし、いくら歩くのに時間がかかっても、[5]われわれは、時のない場所を歩いているという感覚を捨てることはできない。なぜならこの厖大（ぼうだい）な規模の中で、[5]われわれの歩幅が小さいのは単なる偶然であり、一枚のチェスの盤上をゆく蟻（あり）のような[5]われわれの存在に比して、ルイ太陽王の巨大な手は、この大庭園をチェス遊びに手頃な広さと考えていたことは自明であって、時間を感じようにも、こんな壮大な人工的構築物のなかを移動する時間というものは、そもそも[5]われわれの生活体験の裡（うち）には存在しないからだ。

庭がどこかで終る。庭には必ず果てがある。これは王者にとっては、たしかに不吉な予感である。

空間的支配の終末は、統治の終末に他ならないからだ。ヴェルサイユ宮の庭や、これに類似した庭を見るたびに、私は日本の、王者の庭ですらはるかに規模の小さい圧縮された庭、例外的に壮大な修学院離宮ですら[6]借景にたよっているような庭の持つ意味を、考えずにはいられない。おそらく日本の庭の持つ秘密は、「終らない庭」「果てしのない庭」の発明にあって、

それは時間の流れを庭に導入したことによるのではないか。

　仙洞御所の庭にも、あの岬の石組ひとつですら、空間支配よりも時間の導入の味わいがあることは前に述べた。それから何よりも、あの幾多の橋である。水と橋とは、日本の庭では、流れ来り流れ去るものの二つの要素で、地上の径をゆく者は橋を渡らねばならず、水は又、橋の下をくぐって流れなければならぬ。

　橋は、西洋式庭園でよく使われる庭へひろびろと展開する大階段とは、いかにも対蹠的な意味を担っている。大階段は空間を命令し押しひろげるが、橋は必ず此岸から彼岸へ渡すのであり、しかも日本の庭園の橋は、どちらが此岸でありどちらが彼岸であるとも規定しないから、庭をめぐる時間は従って［7］性を持つことになる。時間がとらえられると共に、時間の不［7］性が否定されるのである。すなわち、われわれはその橋を渡って、未来へゆくこともでき、過去へ立ち戻ることもでき、しかも橋を央にして、未来と過去とはいつでも交換可能なものとなるのだ。

　西洋の庭にも、[8]空間支配と空間離脱の、二つの相矛盾する傾向はあるけれど、離脱する方向は一方的であり、憧憬は不可視のものへ向い、波打つバロックのリズムは、ついに到達しえないものへの憧憬を歌って終る。しかし日本の庭は、離脱して、又やすやすと帰って来るのである。

（三島由紀夫「西洋の庭園と日本の庭園」より）

問一　空欄1に入る二字の語を文中から抜き出して答えよ。

問二　傍線部2のように作者が考える理由としてふさわしい文章になるよう、次の一文の空欄2A、2B、2Cに入るもっとも適切な語句を、それぞれ文中から抜き出して答えよ。

水と橋は［　2A　］であり、橋は［2B］と［2C］を結ぶものと考えているから。

問三　傍線部３「精妙な偽善」の説明としてもっとも適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　お金をかけながら、権力がないと思わせるような庭園を造ること
ロ　お金をかければ、安息が得られる庭園を造れると信じること
ハ　お金はかけなくても、権力が否定される庭は造れること
ニ　お金がないのに、偽って安息や権力がないと思わせようとすること
ホ　お金があれば、安息と権力を否定しなくてすむような庭が造れること

問四　空欄４に入るもっとも適切な語を次から選び、記号で答えよ。

イ　自然　　ロ　社会　　ハ　比例　　ニ　超越　　ホ　理念

問五　傍線部５「われわれ」を作者は強調しているが、その理由としてもっとも適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　ヴェルサイユの庭園は、「われわれ」の世界から離別して、超越した場所に造られていることを強調するため

ロ　ヴェルサイユの庭園が、「われわれ」の肉体や感覚とは異なった規模で造られていることを強調するため

ハ　ルイ太陽王の時代は、「われわれ」に比べてはるかに時間と空間を持て余していたことを強調するため

ニ　「われわれ」の生活からは、ヴェルサイユの庭園にある規模の仕掛けは想像できないことを強調するため

ホ　「われわれ」の世界は、ヴェルサイユの庭園を通して巨大な力で統治されていることを強調するため

問六　傍線部６「借景」の意味としてもっとも適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　時間の概念を利用して「終わらない庭」という印象を与える造園法
ロ　庭園の外にある山などの風景を使って庭の景色を想定する造園法
ハ　庭園から離れた景色と時間を組み合わせて庭を形成する造園法
ニ　庭園の規模を故意に縮小して四季の景色を際立たせる造園法
ホ　四季に応じて変化する風景を庭園の中心に置く造園法

問七　二箇所の空欄７に入る語句としてもっとも適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　可逆　　ロ　確実　　ハ　可能　　ニ　規則　　ホ　合理

問八　傍線部8にある「空間支配」と「空間離脱」の説明としてふさわしい文章になるよう、次の空欄8A、8B、8C、8Dに入るもっとも適切な語を、それぞれ文中から抜き出して答えよ。

空間支配とは、庭の中に世界を［8A］する目的を持ち、いかに広い空間でも完全に［8B］な秩序を求めること。

空間離脱とは、空間を無限に［8C］し、建造物で空間を構築しながら、到達できない［8D］のものを憧憬すること。

問一

問二

2A

2B

2C

問三

問四

問五

問六

問七

問八

8A	8C
8B	8D

第七講　心情把握問題解法　40分

次の文章は、山田詠美（えいみ）『海の庭』の一部である。主人公の日向子（ひなこ）は高校二年生。家族は母親の実家で暮らしていたが、高校入学直後に両親が離婚し父が出て行った。父の荷物の搬出にやってきた引っ越し業者（作並（さくなみ））は母の幼なじみで、それ以来、彼はたびたび実家を訪れるようになる。二人は子供の頃、実家の庭を遊び場にしており、その時の会話を二人が再現する様子を日向子は何度か目撃する。日向子も彼と親しく話すようになり、母にならって作並くんと呼ぶが、母と彼の関係に違和感がぬぐえない。夏休み、日向子・作並・日向子の友人の三人で海に行く。これを読んで、後の問いに答えよ。

海に着くと、友達は知り合いの家に預けてあったサーフボードを抱えて早速出掛けてしまった。帰りは、都内に出る用事のあるそこの家の人に送ってもらうと言う。

「日向ちゃんはいいの？　やんなくて」

「今日はお休み。作並くんひとり残すと可哀相（かわいそう）だからね」

私たちは波の立たない場所を捜して泳いだり、波打ち際で遊んだりした。疲れると砂の上に横たわり休んだ。

「ほんとは、このあたり遊泳禁止なんだよ」

「どうりで。人はいっぱいいるのに海の家とか何もないもんなあ」

「作並くん、海好き？」

「好きだけど、ずっと来てなかったなあ。海の記憶っていうと、砂浜に転がってた黄色いサンオイルの容器……だから、たぶん日向ちゃんぐらいの年だ」

「黄色いサンオイル？　何それ、どこの？」

「資生堂だと思うけど。コパトーンとか出る前の話だよ」

「コパトーンのない時代なんてあったの？　有り得ない。作並くん、ずい分昔から生きてんだね」

①作並くんは驚いたように私を見詰めた。意外なことを言われた、と言いたげだった。

「……私、何か変なこと言った？」

「いや。そうか、そんなに年離れてたか。そうだよなあ」

時折吹く強い風に飛ばされた砂粒が陽ざしの中できらめいた。作並くんは遠くで波乗りをする人たちを無言でながめている。海に目を向ける人に

は二つの種類があるのを、私は知っている。そこに現在を見る人と過去を見る人だ。彼は、昔の海水浴場でも思い出しているのだろうか。だとしたら、そこから連れ戻したい。私が見ている海を見て欲しい。せっかくここに一緒にいるのだから。私たち、今、同じ暑さの中にいる。

幼ない頃、両親は、毎年私を海辺に連れて行ってくれた。父の会社の保養施設に宿泊したのだ。私たちは、岩場にみっしりと付いたむらさき貝に鳥肌を立てたり、うみうしをつかんで気味悪がったりした。海には、ずい分と不思議な生き物がいるものだ、と感心した。あの海にいた私に過去も未来もなかった。その時に見ているもの、触れているもの、感じているものだけが、すべてだった。瞬間瞬間に、それらは私をとりこにしていた。そこには、父と母も含まれていた。やがて、私は、家族そろった海辺の夏を失ったが、そこに思いを残すことはなかった。過ぎ去った夏は、幼ない頃の私だけのものだ。今の私のものじゃない。

今の私の海は、ここにある。先週見た海はもう私のものではないし、来週見るかもしれない海も私のものじゃない。今、ここ。むらさき貝もうみうしも、あの時見た他の生物もいない。父と母もいない。その代わりに、浜辺に打ち上げられた海草やボードを抱えて戻って来る男の人や作並くんがいる。この光景が大好きだと思う。けれど、将来、懐しむことはあっても、

この日に戻りたいとは思わないような気がする。思い馳(は)せる過去は、既に何かを失っているからだ。仲の良い海辺の家族が、もういないように。

「作並くんは、昔のママが好きなんでしょ？　今のママには興味ないんでしょ？」

「そんなことないよ。おれ、今の吉田が好きだよ」

「②嘘！　二人共、お互いのちっちゃい頃しか見てない」

「そう見えるの？」

「見える‼」

作並くんは溜息(ためいき)をついた。

「日向ちゃん、解(わか)ってないな。おれが見てるのは小さかった頃の吉田じゃないよ。年取った今の彼女だよ。昔よりずっといい。彼女なりに疲れることして来たんだろう。もうほっぺたに子供みたいな可愛(かわい)い脂肪を付けてないし皺(しわ)もある。それなのに、おれの戻りたい場所をちゃんと隠してる。おれは、もう一度そこに辿(たど)り着きたいの」

「辿り着いたらどうするの？」

「さあ」作並くんは、おどけたように肩をすくめた。

「もう一度、哲ちゃんて呼んでもらうかな」

「それって、やっぱ、初恋やり直すってことじゃん」

頬（ほお）をつねられた。その力が強過ぎて、私は声を上げた。あんまりしつこいので怒らせてしまったかとうかがうと、作並くんは私の頬を撫（な）でて笑った。

「大人が初恋やり直すって、いやらしくて最高だろ？」

その言葉に、私の方が照れた。今まで首を傾（かし）げて傍観していた二人の様子が、鮮明に色を変えて脳裏に浮かび上がって来た。そうだったのか、と腑（ふ）に落ちた。二人は、子供の純粋さを取り戻そうとしていたのではなく、大人の淫靡（いんび）さを作り上げようとしていたのか。③思い出って、そんなことに有効に使えるものなの？　いやらしい、と思った。そして、唐突に、つき合ったことのある男の子たちを思い出した。裸になって、あの子たちとしたこと、あの子たちの体のパーツ、その動き。作並くんと母に比べたら、いやらしさなんて欠片（かけら）もない。そして、それは、なんと退屈に終わりを迎えたことだろう。

「ママとキスしたことある？」

答えようとしないので何度もせがんだ。

「答えないと死ぬ」

「よせよ」

「海に飛び込んで溺れて死ぬ」

「日向ちゃん、泳ぎ上手だから無理だろ」

「じゃ、あのサーファーに頼んで、作並くんのこと海に連れてって捨てて来てもらう」

私は立ち上がり、作並くんの腕をつかんで引っ張って行こうとした。けれども、強い力で反対に引っ張られて彼に覆い被（かぶ）さるような形で転んだ。

「一度だけあるよ」

「どこで？」

「あの庭の離れで。それからもう、あの庭には行ってない。そして、哲ちゃん小夜ちゃんとも呼び合わなくなった。習字なんて嫌だったけど、あの庭は好きだった。でも、中学に入る頃から、おれ、あの庭そのものじゃなくて、離れに行くことが目標になってた。今思うと可愛いもんだけど、あの頃は、そんな自分が後ろめたくてたまんなかったよ」

私は、木々に囲まれて夏でもひんやりとした空気の沈む書道教室を思い浮かべた。二人は、あそこに辿り着きたいのだ。そして、④そこから、もう一度始める。初恋に限りなく似た、けれども、まったく異なるつながりを。

「私、どういう顔して、作並くんとママを見たらいいのか解んなくなっちゃったよ」

「今まで通りでいいじゃないか。こんなことどうってことないよ。だって、

三十年間どうってことなかったんだから」

作並くんは私の体に付いた砂を払った。

「心配するなよ。おれ、吉田とどうにかなろうなんて思ってないから。もう離れに人がいなくなるのを見計らってた頃のがきじゃない」

⑤<u>がきだよ。私は心の中で呟(つぶや)いた。</u>そうしたら哲ちゃんて呼びたくなった。作並くんが、私を日向ちゃんて呼ぶなら、私も、哲ちゃんて呼んでも良い筈(はず)だ。

日が傾く前に、私たちは車を停めてある空地に戻った。途中、通り過ぎようとしたボルボのワゴンの脇で、何人かの男たちが運んで来たポリタンクの真水で体を洗っていた。その中のひとりが、私を呼んだ。時々、教えてもらっているサーファーだ。私は、彼の許(もと)に小走りで近付いて挨拶した。

「日向子、来てるんなら声かけてくれたって良かったじゃん」

「気が付かなかったんだよ」

彼は、少し離れた所にいる作並くんを見て声を潜めようともせず、言った。

「誰だよ、あのおやじ。さっき、二人でべたべたしてたけど、最低。マジで日向子に似合わねえよ、だせー」

「見てたんなら、そっちこそ声かけりゃいいじゃん」

「おれ、おやじ、真面目に、きれーだもん」

「あんたの方が、余程、おやじだよ、ターコ」

「あ?」

呆気に取られる彼を残して、私は、作並くんに駆け寄った。今の会話を聞いて気を悪くしていなければ良いのだが、と思って見詰めると、彼は、無言のまま私を車に促した。

「作並くん、ごめん」

「なんで日向ちゃんが謝るの。おれが、おやじなのは事実でしょ」

作並くんは、そう言って、車の中からTシャツを取り出した。その背中が急な日灼けで真っ赤になっている。彼の肌は、作業着から出ている部分しか黒くない。さっきの男が言った通りだ。ほんと、「だせー」。そう思ったら、涙が溢れて来た。

「おい、どうした、どうした」

作並くんは、慌てて私に近寄って肩を抱いて顔を覗き込んだ。目が合った。真底、困り果てたように目尻がたれている。涙が止まらない。だせーおやじ。情けない。でも、人を情けないと思うのと、いとおしいと思うことってなんて似ているんだろう。

東京方面に向かう車の中でも、私は、ずっと泣いていた。作並くんは、

時々、私の様子をうかがっているようだったが何も言わなかった。家に着いて、私を降ろす段になって、ようやく口を開いた。
「すっきりしたか」
「まあね」途端に気恥しくなり、私は、不貞腐(ふてくさ)れたように口をとがらせた。
「涙を溜(た)め込むと体に悪いらしいぞ。泣きたくなったら、いつでもおれに言えよ。泣かしてやるから」
「どうやって?」
「海に連れてって、あの小僧たちに、おやじよばわりされてやる」
「ばーか、そんなんじゃ泣けねーよ、真実だもん」
笑い声を背後に聞きながら、私は、乱暴に車のドアを閉めた。クラクションを二度鳴らして、作並くんは去って行った。私は、振り返って、車が小さくなるのを見詰めながらひとりごちた。⑥<u>慰めてやる。今度、あいつらが哲ちゃんを苛(いじ)めたりしたら、絶対に私が慰めてやるから。</u>

問一　傍線部①に「作並くんは驚いたように私を見詰めた。意外なことを言われた、と言いたげだった」とある。作並くんは何に驚いたのか。説明せよ。

問二　傍線部②に「嘘！　二人共、お互いのちっちゃい頃しか見てない」とある。日向子がこのように確信していた理由を本文中の言葉を使って説明せよ。

問三　傍線部③に「思い出って、そんなことに有効に使えるものなの？」とある。思い出のあり方に対して日向子はなぜそのように感じたのか。その理由を説明せよ。

問四　傍線部④に「そこから、もう一度始める。初恋に限りなく似た、けれども、まったく異なるつながりを」とある。これとほぼ同じ内容を述べている一文をこれより前から見つけ、冒頭の五字を抜き出せ（句読点を含む）。

問五　傍線部⑤に「がきだよ。私は心の中で呟いた」とある。日向子がこのように感じた理由を説明せよ。

問六　傍線部⑥に「慰めてやる。今度、あいつらが哲ちゃんを苛めたりしたら、絶対に私が慰めてやるから」とある。ここには作並に対する日向子の気持ちの変化が表れている。日向子の気持ちはどのように変化したのか。「涙」「いとおしい」「おやじ」の三語を使って説明せよ。

問一

問二

問三

問四

問五

問六

第八講　内容真偽問題解法　30分

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

言葉使いというものは単なる口癖であるに止まらず我々の考え方に大きな影響を与える場合が少なくない。政府が弱腰だ、[a]オウボウだ、けしからん、などと言っているうちに、政府が人格化されてきて何か巨大な人間のように感じられてくる。時間がある、ない、時間の配分、などと言い馴れているうちにいつしか時間という「もの」があるような気になってしまう。それらと同様に、近頃流行になった、コンピュータが考える、計算する、記憶する、といった言い廻（まわ）しがコンピュータの人格化に誘う危険がある。【A】その一方で今度は脳についての同様な言い廻しが脳の人格化を招きつつある。そして本当の人間そのものの影が薄くなってしまうのではないかという[b]キグすらでてきている。そこで一旦踏みとどまってコンピュータと脳についての言葉使いを反省してみることにしよう。

コンピュータが例えば複雑な計算をする、それも人間の到底及ばぬ速さと正確さでやることは珍しくもない事実である。【B】それに疑いをかけ

ようというのではない。しかし私が問題だと思うのは、コンピュータが計算するという時の「計算する」という言葉の**意味**なのである。

　例えば、コンピュータに一〇〇桁をこえる二つの数の掛算をやらせると立ち所に正確な答を打ち出すだろう。簡単に言えば、計算問題をインプットすればその正しい答をアウトプットするのである。そしてこのように、計算問題を与えると正しく解答する、ということをコンピュータは「計算する」と言っているのである。【C】コンピュータが打ち出す答は生身の人間が出す正答と何の区別もない。手すきの紙と機械すきの紙の間には歴然とした違いがある。本当の手打ちそばと工場製のそばの間には明らかに味の違いがあるだろう。【D】しかし、計算問題で人間が計算した答とコンピュータが打ち出した答との間には全く何の違いもないのだから、人間が計算する、と言うのなら当然「コンピュータが計算する」といっていいわけである。

　しかし、このようにコンピュータについては容易に「計算する」と言われるのに、算盤（そろばん）についてはそう言いにくいのはなぜだろうか。それは算盤はコンピュータ程には「自動的」でないことによると思われる。進歩したコンピュータは計算の問題を光学的、または音響的に「読み取る」だろうが算盤は人間が指で珠を動かさねばならない。また計算結果もコンピュー

タは自動的にプリントするのに対して算盤は人間が「読み取る」必要がある。こうして、コンピュータがいわば全自動計算機械であるのに対して算盤は高々の所半自動装置なのである。そのため、コンピュータは人間と肩を並べて「計算する」といえるのに、算盤は単に人間の計算の補助道具であってそれ自体が独立に「計算する」などとは到底いえない、こうわれわれは感じているのである。だから、算盤の入力部分をできるだけ自働化し、出力部分も自働的表示にした卓上計算機に対しては、われわれは「計算する」ということに[c]テイコウを感じないのである。

このようにしてコンピュータが「計算する」という言い方を許す方式を「機能的同類化」と呼んでおこう。それは「計算する」という機能からみて、またその機能に限ってみるならば、コンピュータを人間と同類にあつかってかまわない、ということだからである。

この[2]機能的同類化の核心は、（　　　　　　　　　）、ということである。問題提示→解答表示という作業遂行ということだけで同類化が許されるのであって、それ以外のいかなる同類性も意味しないのである。人間が鉛筆をなめなめ頭をひねって足し算や掛け算をするときの「経験」に類したことはコンピュータには一切[d]カイムであることはいうまでもない。コンピュータには「経験」などがあるはずもない。あるのはただおびただしい

LSIを含んでいる電気回路の作動だけである。このことに気がつかず、あるいは忘却して、コンピュータが人間の経験に何程か類似した経験をもっているという意味で「コンピュータが計算する」と言うとすればそれは明白な誤りである。この誤りを意識的に犯す人はいないだろう。しかし、コンピュータが「計算する」「記憶する」「判断する」といったことを無頓着に口にのぼせ、やがて習慣的に口がすべるようになると、無意識のうちにこの誤りに誘い込まれる危険がなきにしもあらずなのである。この危険率は次に述べる脳についての言い廻しが加わることで一層増大する。

　例えば私が何か計算をしているとき、私の脳は忙しく動いていることは疑いない。この脳の動きが何かの原因で止ったなら私の計算も停止するだろう。アルコールその他の薬物で脳の動きが[e]ボウガイされると私の計算はうまくいかないだろう。この脳の動きが具体的にはどんな動きなのかは現在なお正確に言えないにせよ、人間の知的活動には脳の動きが伴い、脳の動きが不可欠であることは現代の常識であろう。そして[3]この状況から一つの誤解が生（うま）れてくる。私が計算をするとき、計算するのは如何にも私であるがそれは表面のことであって実は私の脳が計算するのだ、という誤解である。この誤解が育ってゆくと、やがて、右脳が言語を理解する、左脳が空間認識をする、側頭葉が記憶する、といったたわごとを口走るまでにな

りかねない。それを防ぐために事の始めに戻って事態を観察してみよう。

（中略）

日常的意味で私が「計算する」時に何が起っているか生理学的に観るならば、その中核となるのは私の脳に生じている過程であろうことには間違いない。この脳で生じている過程の精細は現在もなお不明であるだろうがそれを「脳過程（計算）」と表わすことにしておこう。同様に、「脳過程（判断）」とか「脳過程（記憶）」とかが考えられることはいうまでもない。

　すると、「私が計算する」という命題が表現している事態を生理学的に表現するならば「（私の）脳に脳過程（計算）が生じている」ということになる。言い換えると、日常的には「私が計算する」ということはとりもなおさず即ち「脳に脳過程（計算）が生じている」ということなのである。そしてこのことは生理学的研究が発見したことであるのは、「物が燃える」ということは即ち「それが酸素と化合する」ということだと化学の研究が発見したのと同様である。したがって、燃焼とは実は酸化に他ならないといわれるのと同様に、私が計算するとは実は脳過程（計算）が起きることに他ならないと考えられるのである。つまり、学問的研究によって得られた新知識に基づいた新しい表現で古い常識的表現を置き換えたのだ、と感じられるのである。だがたとえそうだとしても古い常識的表現を御用済み

にして使い捨てにする必要はあるまい。むしろこの常識的表現と科学的表現を同一事態の二通りの異形表現だとみるべきではなかろうか。それぞれの表現にはそれに適切な状況があってその状況では他方の表現は場違いになるのである。例えば幼稚園やスーパーで科学的表現を使えば物笑いの種になる。「昨晩お向いのお宅が酸化しましてね」とか「ちゃんと脳過程（計算）を起こすんですよ」とか。

　このような日常的表現と科学的表現との関係を[4]一般に「重(かさ)ね描(えが)き」の関係と呼ぶことにする。例えば私が計算をするという一つの事態を一方は日常的な観察態度で日常的言葉を使って表現し、今一方は科学的観察態度で科学的用語を使って表現する。そしてこの二つの表現は共に同一の事態の描写として時間空間的に重なるものだからである。「奥歯が痛い」という日常表現には、奥歯の細菌による化膿(かのう)、そこからの痛覚神経のパルス伝達、そこから二・三のシナプス（神経接合部）を経ての大脳皮質神経細胞の興奮、といった科学描写が、奥歯の場所を始めとして空間的に、また痛みの始まりや強弱の時刻などの時間に重ねてなされる。何かを判断する、何かを憶い出す、といった日常描写にも同様に時間空間的に重ねて脳の中の生理学的描写がなされる。

　しかし注意すべきは、この「重ね描き」の関係にあるのは日常描写と科

学描写という二つの命題であって、その命題の中の個々の単語ではないということである。ましてや、重ね描き関係にある二つの命題の一方の主語に他方の命題の述語を付けるなどということは決して許されることではない。もしそんなことをすれば全く意味不明なキメラ命題になってしまう（キメラとは二つの動物を接合した化物的生物である）。

ところが、「脳が計算する」という命題はまさにそういったキメラ命題に他ならない。

それは、「私が計算する」という日常表現の述語を、それに重ね描かれる「脳に脳過程（計算）が起きる」という科学命題の主語に付けた命題だからである。

（大森荘蔵『思考と論理』より）

※問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問一　傍線部a～eを漢字表記に改めた場合、それと同じ漢字を傍線部で用いるものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

a 「オウボウ」
①　オウチャクな態度をとる。
②　雪で車が立ちオウジョウする。
③　好奇心がオウセイだ。
④　悪口にオウシュウする。

b 「キグ」
①　キチに富んだ会話を交わす。
②　キシ回生のチャンスをうかがう。
③　キトク状態に陥ってしまう。
④　争いごとをキヒする。

c 「テイコウ」
①　激しいコウボウ戦が続く。
②　コウバイのゆるやかな坂道を歩く。
③　武力コウソウに巻き込まれる。
④　身柄をコウソクされる。

d 「カイム」

① 取引をバイカイして利益を得る。
② 計画をすべてテッカイする。
③ ケイカイなリズムで踊る。
④ カイキン賞を目指してがんばる。

e 「ボウガイ」

① 雑音が気にサワる。
② 通行をサマタげる。
③ 行く手がハバまれる。
④ 差しツカえのない返事をする。

問二　二重傍線部X・Yについて、その意味として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

X「歴然とした」

①　筋道のはっきり通った　②　証明する必要のない

③　はっきりと明白な　④　並べてみるとわかる

Y「とりもなおさず」

①　それがそのまま　②　とりあえずは

③　考えるまでもなく　④　それには及ばず

問三　次の一文の入る箇所として最も適切なものを、後の中から一つ選べ。

もちろんこの言い方は当然な言い方である。

①【A】　②【B】　③【C】　④【D】

問四　傍線部１「コンピュータについては容易に『計算する』と言われる」とあるが、なぜだと筆者は考えているのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① コンピュータは人間にとって身近な存在で、特に計算能力に関してはその速さと正確さが人間の能力をはるかに超えているから。

② 生身の人間が計算して出した結果とコンピュータが出した結果がまったく同じで、コンピュータは他の機械とは別格といえるから。

③ 人間が計算する際に用いる道具として、扱う人間自身の能力に左右される算盤と異なり、コンピュータは完全に自立しているから。

④ コンピュータは人間の補助がなくても自動的に計算することができ、その機能に限って人間と同類にあつかうことができるから。

問五　傍線部2の空欄に補う言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① 同類化は「計算する」という機能に限っていえることであって他の機能ではいえない

② 同類化はただ機能の観点だけからであって機能以外の点での同類化を一切拒否する

③ 同類化はコンピュータだけに当てはまることであって他の機械はこれを拒絶する

④ 同類化は問題提示をして解決を示すことが条件であって解決以外のことは許されない

問六　傍線部３「この状況から一つの誤解が生れてくる」とあるが、ここでの「誤解」とはどのように考えることなのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① 人間の脳の動きの詳細は正確にわからないのに、「計算する」という知的活動には脳が不可欠だと考えること。

② 「計算する」のは人間の身体全体で行われることなのに、脳の表面で行っているにすぎないと考えること。

③ 人間が「計算する」場合、脳には脳過程が生じているにすぎないのに、脳自身が計算しているのだと考えること。

④ 脳の機能は万能ではないのに、「計算する」ことを始め人間のすべての知的活動を脳が司ると考えること。

問七　傍線部４「一般に『重ね描き』の関係と呼ぶことにする」とあるが、「重ね描き」に関する説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　同一事態には常識的表現と科学的表現があり時間空間的に重なるが、科学的表現は古い常識的表現を新知識によって置き換えたもので、正確な表現だといえる。

②　学問的研究によって何かが発見されるたびに、常識的表現のうえに新しい知見による科学的表現が上書きされ、時間空間的な層が重なり厚くなっていく。

③　日常描写と科学描写は同一の事態を重層的に捉えて表現するためのもので、観察態度として日常的であることと科学的であることが同時に求められている。

④　一つの事態の描写として日常的言葉と科学的用語をそれぞれ用いた二通りの表現があり、時間空間的に重なるが、状況に応じた使い分けがなされている。

問八　本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選べ。

①　人間の脳の代わりになる能力をもつコンピュータは、機能が多角化するにしたがい人格をもつと誤解されるようになった。

②　コンピュータや脳に関するキメラ命題のような言いまわしは、それらを人格化して捉える誤りに陥らせるおそれがある。

③　不適切な言葉使いは考え方に影響を与え誤解を招くことがあるので、科学的用語は意味を誤らないよう正確に用いるべきだ。

④　言葉使いの乱れとともに、日常描写と科学描写という二つの命題が正しく捉えられず、物事の真実を見極められなくなった。

問一

a

b

c

d

e

問二

X

Y

問三

問四

問五

問六

問七

問八

巻末付録

読解法一覧

読解法1　文の構造

文を読むときは「主部と述部」「修飾部と被修飾部」「接続部と文」という文の構造に気をつけよう。

《分析記号》
〈主部〉（＝とんがりカッコ）
【修飾部】（＝四角カッコ）
接続部　／（＝スラッシュ）　文

読解法2　指示語・接続表現

文を読むときは「指示語」と「接続表現」に気をつけよう。「指示語」があれば「指示内容」を捉え、「接続表現」があれば「前後のつながり」に注意する。また、本書では「論理的なつながり」を強調するため、「接続詞」「接続語」ではなく「接続表現」という表記で統一する。

《分析記号》
「指示語」　＝　○で囲む
「接続表現」　＝　○で囲む

「指示語」のカテゴリー

①「指示語」

前の名詞や説明を指す。

「これ」「それ」「あれ」指示語（指示代名詞）
「この」「その」「あの」指示語（指示連体詞）

②「一般化の指示語（まとめの指示語）」

前の具体例や詳しい説明をまとめる働きがある。指示内容は前に書かれている説明を幅広く捉える必要がある。

「このような」「そのような」「こういう」「そういう」

「接続表現」のカテゴリー

①「解説」

前の語や文や段落を詳しく説明したり、要約的にまとめたりする。

「つまり」「つまるところ」「すなわち」
「要するに」「畢竟」「結局」
↓要約的な言い換え
「言い換えれば」「換言すると」
↓言い換え
「言わば」
↓改まった表現（比喩表現・個人言語）への言い換え

②「例示」

前の内容の具体例を引いたり、一部を強調したりする。

「例えば」「言ってみれば」
↓読者の理解のための具体例をひく
「とりわけ」「なかんずく」
↓全体の中から一部を取り出して強調する

③「理由」

前の文に対する理由を説明する。

「なぜなら」「というのは（も）」
↓評論文に多い
「けだし」「だって」
↓小説文・随筆文に多い

④「帰結」

前の文からの結果・結論を示す。（順接が多い）

「だから」「したがって」「それゆえ」
「ゆえに」「よって」「それで」
「そこで」「すると」「そして」
（因果関係がない場合もある）

⑤「転換」

前の主張や主題を転換する。

「しかし」「だが」「ところが」「とはいえ」「さりとて」
「それでも」「それなのに」「それにしても」「けれども」
「けれど」
↓「主張」の方向転換（逆接）

「さて」「ところで」「閑話休題」
↓「主題・話題」の転換

⑥**「付加」**

前の内容に別の内容を付け加える。

「さらに」「しかも」「そのうえ」「加えて」
「また」「および」「かつ」
「だけでなく」「のみならず」
↓単純な付け加え

「一方、他方」「もう一方で」「他方で」
↓対照的な内容を付け加える

⑦**「補足」**

反対の内容を補足する。

「ただし」「もっとも」

⑧「選択」

前の内容と後の内容のいずれか一方を選択する（両方の場合もある）。

「または」「あるいは」「もしくは」「ないし（は）」「それとも」

読解法3 文の関係

文を読むときは「同値（イコール）」「対立」「因果」「包摂（抽象具体）」という関係に注意する。「文の構造」「指示語」「接続表現」といった形式、および「言葉の意味」といった内容の両面から「文の関係」を捉える。

《分析記号》

①「同値関係」 A＝B

②「対立関係」 A⇔B

③「因果関係」 A→B

④「包摂関係」 A－a'

読解法４ レトリック（説得話法・修辞法）

筆者は自分の主張を理解してもらうだけでなく、納得してもらえるように様々な方法を用いて工夫をしている。その工夫が「レトリック（説得話法）」である。文を読むときには「レトリック」に気をつけよう。

① 「問題提起」

読者に疑問を投げかけて意識を誘導し、答えとして自説を述べる。「疑問文」があったら、そのあとに「答え」が来ることを予想しながら読もう。

《分析記号》　波線をひく
「疑問文」→「◎答え（自説・持論）」

② 「具体例」「体験談」

読者がイメージしやすいような例をあげる。また、実感を込めるために体験談をあげる。これらは筆者の主張を伝えるための手段なので、（丸カッコ）で括りながら常に「筆者の主張」を意識して読もう。

《分析記号》（丸カッコ）で括る
「◎主張」→（△具体例、体験談）→「◎まとめ」
抽象　→　具体　→　抽象

③「引用」

筆者が別の文章の筆者と対話しながら文章を展開することがある。二人で議論を進めることにより、論を深めるためである。引用は筆者の主張に対して「同意見」「反対意見」「根拠」「具体例」となるものがある。引用も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

《分析記号》（丸カッコ）で括る
（△引用）→「◎筆者の説明・解釈」

④「比喩」

内容のイメージを喚起しやすくするために別のものに喩える。

《分析記号》□で囲む
「直喩」　＝「ような」「みたいな」をつけて喩える
「隠喩」　＝「ような」「みたいな」をつけないで喩える
「擬人法」＝人でないものを人に喩える
「類比」　＝同じグループ内の別のものに喩える

⑤ **「譲歩」**

一般論や反論に一旦は理解を示しながらも、方向転換をして自説・持論を展開する。

《分析記号》 ○ で囲む

「確かに」「もちろん」「なるほど」「むろん」→△一般論・反論
「しかし」「だが」「けれど」→◎自説・持論

読解法5 論理フレームワーク

筆者は自分の伝えたい内容を定義・整理・分類することで、内容を正確に相手に伝えようとする。あらゆる筆者に共通する整理の仕方が「フレームワーク」である。内容を正確に掴むためにも「論理フレームワーク」に注意しよう。

《分析記号》 ○ で囲む

①「否定」のフレームワーク

Aではなく、（ではない。）Bである
Aより（ではなく）むしろB
Aのようで実はB

※AとBが反対の内容になる場合が多い。
※Bに筆者の主張が来ることが多い。

②「条件法」のフレームワーク

AならばB（AはBである）
Aの条件（前提、本質、基本）はBである
Aは常に（必ず、絶対）B
すべてのAはBである（全称文）
AのためにはBでなければならない
（AのためにはBである必要がある）
BでないならばAでない
B以外にはAはない
Bのときのみ（だけ、に限り）A

Bしてはじめて（してこそ）A

※主張（命題）を表す。
※Aは十分条件、Bは必要条件を表す。
※「AならばB」の否定は「Aは必ずしもBとは限らない」である。
「AであってBでない」ような「反例」が挙げられる。

③「連言」のフレームワーク

AかつB
Aさらに、そのうえ、加えて、B
Aだけでなく、（だけではない。）Bも
Aのみならず、Bも
Aと（や）B
Aつつ、ながら、同時に、ともに、B

※Aという主張とBという主張が同時になされている。
※「AかつB」の否定は「Aでない、またはBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

④「選言」のフレームワーク

AまたはB
AあるいはB
Aもしくは、B
Aないし（は）B
Aか（や）B

※Aという主張かBという主張のうちどちらか一方（または両方）がなされている。
※「AまたはB」の否定は「Aでない、かつBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

⑤「差異（対比）」のフレームワーク

AはXであるのに対し、BはYである
AはXであるのとは異なり（違って、別に、逆に）、
BはYである

※AとBの相違点を説明する。
※XとYは反対の内容になる場合が多い。

⑥「変化」のフレームワーク

ＡからＢへと変化する
ＡだったものがＡでなくなる

※ＡとＢは反対の内容になる場合が多い。

⑦「類似（類比）」のフレームワーク

ＡはＸである。Ｂも（また）Ｘである
ＡとＢはともにＸである
Ａと同様にＢも（また）Ｘである
ＡとＢはＸという点で同じである

※ＡとＢの共通点を説明する。

⑧「逆説」のフレームワーク

Aすると、かえってB
Aと同時にB

※AとBは反対の内容になる。
※一見矛盾しているように見えるが真である。

⑨「因果」のフレームワーク

AだからB
AなのでB
AによってB
AのためB

※AとBに因果関係がある。

読解法6 論証

筆者は自説を主張するが、その主張は読者にとって飛躍があったり、常識に反する内容であったりする。そこで、筆者は読者に納得してもらうために「論証（証明）」を行う。その「論証」を読むために「論証のフレームワーク」に注意しよう。

①単純な論証

A（○根拠）→ B（◎結論）

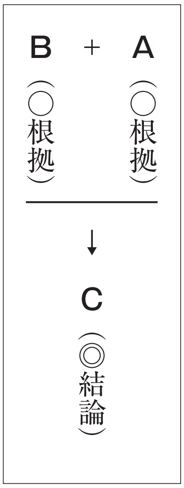
※根拠Aから結論Bが導かれている。

②論証の連鎖

A（△根拠）→ B（○根拠）→ C（◎結論）

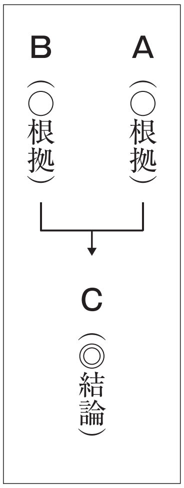
※主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

③結合論証



※主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。
※AかBかどちらか一方がもしないならば、この論証は成立しなくなる。

④合流論証



※根拠Aだけでなく根拠Bもあり、結論Cが導かれる。
※AとBはそれぞれ単独でも根拠になる。

読解法7 心情

小説文や随筆文では登場人物や作者の「心情」が問われる。「心情」を捉える際にはその心情が発生する「原因」まで捉える必要がある。そこで、「心情」を捉えるための「因果関係」を「心情」のフレームワークとして覚えよう。

①単純な心情

原因	→	**心情**	→	**結果**
（事態、事情）				（行動、反応、発言）

※「心情」部分が書いてない場合は「原因」と「結果」から推測する。

②心情の変化

心情A →（変化）→ **心情B**
↑
変化の原因

※心情Aから心情Bへの変化を捉える。
※心情は反対のものになる。
※「心情A」「心情B」「変化の原因」の三点を捉える。

③結合原因の心情

原因A（外的）
＋
原因B（内的）
→ **心情** → **結果**

※「原因A」と「原因B」が組み合わさって「心情」が発生する。
※「原因B」は特殊事情であることが多く、「セリフ」「心中文」「過去のシーン」によって明らかになることが多い。

④心情の交錯

原因A → 心情A
＋
原因B → 心情B
→ 結果

※「心情A」と「心情B」が同時に存在する。
※「心情A」と「心情B」のそれぞれに「原因」がある。
※「心情A」と「心情B」は相反する心情である場合が多い。

傍線部内容説明問題解法「どういうことか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・指示語
・比喩表現
・個人言語

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

①「文構造」の分析について

★文法的構造

・主語（主部）―述語（述部）
・修飾語（修飾部）―被修飾語（被修飾部）や目的語（目的格）や補語（補格）など
・接続助詞や連用中止法
・倒置や省略

★論理的構造

・否定　・差異（変化）
・連言　・類似（アナロジー）
・選言　・逆説
・条件法　・因果

設問を解く際には、まずは傍線部（または傍線部を含む一文）の統語論的「構造」を分析することからスタートする。この構造を正確に分析して、なるべく元の構造を生かして、解答を構成するためである。ただし、日本語の慣習的統語規則を鑑みて、受動態から能動態に変換するなど元の構文を変形する場合もある。

②「ポイント」になる語句について

★ 指示語（代名詞）

㊈ これ、この、このような、このように、それ、その、そのような、そのように　など

㊹ 前者、後者、両者、右の、彼　など

★ 比喩表現　＝　直喩、暗喩、メタファー、レトリック　など

★ 個人言語　＝　筆者が一般的な意味とは異なる特殊な意味で使っている言葉、学術（専門）用語

③「解答の根拠」となる部分との対応について

★ 同値関係

★ 対立関係

★ 因果関係

★ 包摂関係（抽象と具体の関係）

以上の関係がある部分と対応させる。
このような関係で対応した部分が、記述解答を書く際の「解答の根拠」となる。

傍線部理由説明問題解法「なぜか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
- ・文法的構造
- ・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
- ・A→×
（飛躍している部分）

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

Ⅰ「A↓x」の発見

論証が必要な命題（文）には「A↓x」という飛躍した部分がある。まずは、どこに飛躍があるかを見つけよう。

①主語（主部）↓述語（述部）に飛躍がある場合。
②修飾部（接続部）↓被修飾部（被接続部）に飛躍がある場合。

※文構造（係り受け）を分析する中で、構造的につながっているが、意味的につながっていない部分を探す。
※「x」は、「なぜ『〜』か」というように設問が指定している場合もある。

Ⅱ 論証部の発見

飛躍を埋める部分が論証部となる。「A↓x」のAの説明を求めよう。

Ⅲ「論証」のフレームワーク

①「単純な論証」 A → B

根拠Aから結論Bが導かれている。

〈例文〉 A子ちゃんは美人だ。　**根拠　A**

したがって、　↓ **導出**

私はA子ちゃんが好きである。　**結論　B**

※実はこの導出に必要な前提として、「私は美人が好きだ。」というものがある。
これは「隠れた前提」として筆者の論証が成り立つように補ってやる必要がある。
筆者の論証が成り立つように隠れた前提を補うというルールを「**寛大の原則**」という。

②「論証の連鎖」 A ↓ B ↓ C

主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

〈例文〉 A子ちゃんは目鼻立ちがはっきりしている。　**根拠 A**

したがって、　↓ **導出**

A子ちゃんは美人だ。　**根拠 B**

したがって、　↓ **導出**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張 C**

※この形が「論証」の中では一番多い。「論証」の最後に来る文が「主張提示文」になる。
その前の文は「根拠」となる。

③「結合論証」

B ＋ A
↓
C

主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。

〈例文〉

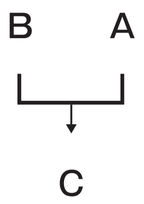
A子ちゃんは美人だ。　**主張A**
＋ **結合**
私は美人が好きだ。　**主張B**
＝ **根拠**

したがって、 ← **導出**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※先に説明した「隠れた前提」がある場合、この結合論証となる。
この形も「理由説明問題」ではよく出題される。

④「合流論証」



根拠Aだけでなく根拠Bもあり、結論Cが導かれる。

〈例文〉

A子ちゃんは美人だ。　**根拠A**

また、

A子ちゃんは性格もよい。　**根拠B**

したがって、　**導出**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※この場合はどちらか片方だけでも「根拠」になる。
設問の場合には「理由を二つ説明せよ」となることが多い。

Ⅳ　論証を捉えるヒント

A　帰結の接続表現

「だから」「したがって」「よって」
「それゆえ」「ゆえに」
「それで」（「そこで」）

B　理由の接続表現

「なぜなら」「というのは（も）」
「けだし」「だって」

C　助詞など

「〜から」「〜ので」「〜ため」「〜より」「〜のだ」「〜のである」　→　**〜が原因・理由を表す**

D　直接表現、比喩表現など

「理由」「原因」「結果」「帰結」「結論」
「〜から生じる」「〜に根ざしている」
「根源」「背景」など

傍線部心情把握問題解法「心情」の解答プロセス

① 「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

←

② 「ポイント」を把握する。
・原因 → 客観的事態や主観的事情
・心情 → ⊕心情や⊖心情
・結果 → 行動や反応や発言

←

③ 「解答の根拠」となる文と対応させる。

Ⅰ　単純な心情

原因 → 心情 → 結果

※心情把握問題の基本形。
※この場合は心情が書いてないため、原因と結果から挟み撃ちして心情を把握する問題になっていることが多い。

Ⅱ　心情の変化

原因A → 心情A → 結果A → 原因B → 心情B → 結果B

※心情把握問題で一番有名な問題。
※心情Aから心情Bへの変化、そして変化の原因を三点セットで捉える必要がある。

Ⅲ　結合原因の心情

原因A
＋
原因B
↓
心情
↓
結果

※原因Aだけ捉えて答えようとすると間違いになる選択肢が多い。
※原因Bは**「リード文」「会話文」「心中文」「回想シーン」**などにある場合が多い。

Ⅳ　心情の交錯

原因A　→　心情A
＋
原因B　→　心情B
――――
→　結果

※一番分析が難しい問題。
※心情Aの原因が原因Bになっていたりと、原因の部分を入れ替えての誤答選択肢が多い。

空所補充問題解法 「空所」の解答プロセス

① 空所のある文に線を引く。

← ② 「文構造」を分析する。
- 文法的構造
- 論理的構造

← ③ 「解答の根拠」となる文と対応させる。
- 似た構造の文に注意

脱文補充問題解法 「脱文補充」の解答プロセス

① 「脱文」を分析する。

・文法的構造（特に指示語）

・論理的構造（特に接続表現）

↓

② 「前の文」とつなげてみる。

・指示内容

・接続

↓

③ 「後の文」とのつながりを確認する。

文整序問題解法 「文整序」の解答プロセス

①「整序する文」を分析する。
・文法的構造（特に指示語）
・論理的構造（特に接続表現）

↓

②「繋ぎやすい文」からつなげてみる。
・指示内容
・接続

↓

③「すべての文」をつないで読んでみる。

内容真偽問題解法 「内容真偽」の解答プロセス

① 「それまでの問題」を解く。

↓

② 「選択肢」を分析する。

・文法的構造
・論理的構造

↓

③ 「本文」と対応させる。

解答解説

第一講 「差異」と「類似」を読む　解答解説

問一　③

③隣接　臨海　①降臨　②臨床　④君臨　⑤臨終

問二　②

②不明　未詳

問三　⑤

⑤空疎　素朴　疎遠　疎密　疎外　疎通　疎隔

問四　④

問五　⑤

問六　③

問七

③

問八

②

第二講「論証」を読む　解答

問一　エ

問二　イ

問三　5,000

問四　ア

問五　妥協の産物

問六　カ

問七	問八	問九
イ	ウ	オ

第三講　「心情」を読む　解答

問一	問二	問三	問四	問五	問六
A	C	D	E	A	E

問七	問八	問九	問十	問十一	問十二
D	B	C	E	A	C

第四講　傍線部内容説明問題解法　解答

問	設問	解答
問一	(1)	4
	(2)	2
	(3)	3
問二	(ア)	1
	(イ)	4
問三		3
問四		3
問五		2
問六		3

問七	問八	問九
4	1	1

第五講　傍線部理由説明問題解法　解答

問	設問	解答
問一	ア	⑤
問一	イ	①
問一	ウ	③
問二		③
問三		⑤
問四	a	③
問四	b	⑤
問四	c	②
問四	d	③
問四	e	①
問四	f	④
問五		②

問六	問七	問八	問九	問十	問十一
②	④	①	⑤	③	①

問十二

②

問十三

③
⑥

第六講　空所補充問題解法　解答

問一
彫刻

問二
2A 流れ来り流れ去るものの二つの要素
2B 此岸
2C 彼岸

問三
イ

問四
イ

問五
ロ

問六
ロ

問七

イ

問八

8A	8B	8C	8D
包摂	可視的	拡大	不可視

第七講　心情把握問題解法　解答

問一

作並の方がかなり年上であることを日向子に指摘され、気にかけていなかった年齢差を自覚させられたこと。

問二

作並が現在の自分の年齢を自覚していなかったことから、作並は海に目を向ける時に現在を見る人ではなく過去を見る人だと思ったから。

問三

過去の思い出は現在と隔絶したものだと日向子は考えていたため、過去の思い出を再現することで現在の関係を作り出す作並の考えに対して意外に思ったから。

問四

二人は、子

問五

作並は今隣にいる日向子ではなく、子供の頃に好きだった母に好意を抱いているから。

問六

初めは母に対する対抗心から作並の気を惹きたいと思っていたが、知り合いに作並をおやじだと指摘されることで、ださくて情けないと思い涙が溢れた。と同時に、情けないと思うのと、いとおしいと思うことが似ていることに気がつき、作並に対していとおしさを感じるようになった。

第八講　内容真偽問題解法　解答

問一

a	b	c	d	e
①	③	③	④	②

問二

X	Y
③	①

問三

③

問四

④

問五

②

問六 ③

問七 ④

問八 ②